

昭和十年五月廿日第三號郵政特許認可
昭和十五年七月廿日印刷
昭和十五年八月一日發行

第六卷 第八號

淨土

八月



金

陸海軍 慰問浄土 病院

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に二ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に六千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十萬冊以上の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◆全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◆一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◆毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◆個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◆御送金は浄土宗務所事務變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

新發賣

一日一球で健康量



肝油を精製した
純ビタミンA D

肝油が効くのはビ
タミンAとDの爲
だと判つてゐる今

日、魚油のまゝの肝油で我慢する必要はあ
りません。本品は肝油から精製抽出したビ
タミンAとDを無味無臭のグロビュール球
に収めた快適な製品。肝油の効果は完全
に数十倍に強化され且快適化されました。

合理的な新製品

新製品「研理ビタミン球」は、最近のビタミン學
說に據り、一日二球づゝ服めば完全に生理的
健康量を満たせる様に、一球ビタミンA五千
D一千國際單位を含有させた製品。しかも
大豆ほどの小球です。

一月量 六〇球 二圓

品製研理

研理 ビタミン 球

總代理店
株式會社
玉置商店
振替東京七二番

藥店にあり
品切の際は總代理店へ



隆

浄土八月號目次

表紙

扉・目次カット

鈴木金平

米倉隆從

拜まれた氣持……………辻重光(二六)

秋風身邊に在り……………吉田絃二郎(二六)

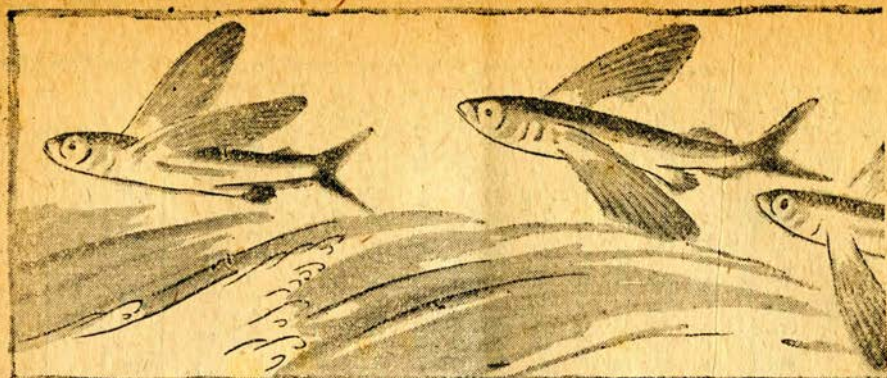
信仰實話 反魂丹のことども……………増谷文雄(二〇)
 囚人の純情……………石橋徳作(二六)

報身の彌陀……………浄き友の會座談會(四四)

子供の躰けかた……………坂本一郎(二九)

戎衣の言葉……………和田眞澄、渡邊明道(三〇)
 安田秀賢、千々和英雄

信仰相談……………中村辨康(三三)



實話 不思議な話……………冲 常 全(哭)

短篇 あしたは天氣……………楠 あきや(哭)

阿彌陀さま……………佐藤春夫(哭)

會のこと・會員のこと……………佐藤賢順(四)

歌壇……………與謝野晶子選(五)

俳壇……………太田耳動子選(五)

お寺の相談所……………安島大祥(吾)

心經 講義 中道を歩む信仰……………中村辨康(老)

會員通信……………(五)

編輯後記……………(五)

會のこと

會員のこと

丸のやうな人だ。一寸紹介してをく。

これで宿將道瀨幸雄君と一瀬、辻の兩新銳を加へ

毎月といふわけではないが、時々この欄で、會のことや會員の消息など、お報せしてをきたいことを書かせて貰ふ。

會の本部事務所も、三月に多少の人事の移動があつたことは、その當時お報せしたが、五月の中旬から辻重光君が復歸して働いてく

れてゐる。辻君は會創立當時から献身的に協力してくれてゐたの

を、一昨年の秋、應召して、川上部隊に屬し、廬山、南昌方面を轉戦し、多くの武功を立て、この春

歸還した。一瀬秀雄君と同様、陸軍中尉で、一瀬君とは戦線で幾度

か手を握り合ひ、大に飲んで、挿話を残してゐる。からだ全體が弾

丸のやうな人だ。一寸紹介してをく。

これで宿將道瀨幸雄君と一瀬、辻の兩新銳を加へ

陣ができた。今年大正大學を出た

原源祐君も手傳つてくれてゐる。

この春以來、道瀨君が精密に立て

てくれた計畫に従つて、事務全般

も大刷新を行つてゐる。もう暫く

たつと、その整備が完了するの

で、仕事もずつと能率的になる。

六月の末、房總方面へ赴く機会があつて、赤十字社海濱學校々長の和田正系博士を富浦町のお宅に

お尋ねした。この前お尋ねした時

も六月の末で、博士の景仰限りな

き廣隆寺の觀音に摸して、青銅で

お作りなつた小さな觀音様の開眼

式の折で、私が潜越ながら開眼を

つとめ、島野禎祥君や東慈道君な

どが一しよであつた。それが丸二

年前である。その觀音様は春日作

りのお厨子の中に、今日も淡然と

静かな微笑をたゝえて居られた。

色々話が出た。話は盡きた

い。その数々の話の一つ、凡そ一

年半ほど前に、庭つゞきの裏山の

竹籬の中から數體の地藏尊像を發

見なまつた、それを道路に近い所

に安置して、屋根をしつらへ、お

線香やお花などを供養するに都合

よいやうに線香立てや花立てを作

るだけでなく、御自身でも、特に一體の地藏尊を刻ませて、安置せ

られた。するとこれを知つた近隣

の人々は皆、こゝへお参りするや

うになつて、遠くの海へ漁に出る

漁師は出かける前に必ずお参りし

て大漁と無事を祈願してゆくかう

である。

約一年半ほどの間にお賽銭が二

百圓近くにも及んだ。一錢銅貨を

五圓宛に包んで、館山海軍航空隊

へ三十圓づゝ三回、蓮臺寺三福寺

等五ヶ所の托兒所へ二十五圓づゝ

二回、その他消防組や町の氏神様

の淨い志を有意義に生かされたの

である。

「ほんとうに物好きでございま

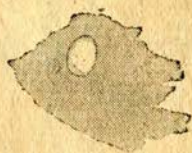
して」と奥さんは謙遜なさるが、

この淨行を廣く紹介せずにはゐら

れない。(佐藤)

淨土

八月號



衆生しゆじやうの心こころはつねに名利めいりにそみて、にこれ
る事こと、かの水みづのごとくなれども、念佛ねんぶつの
摩尼珠まにじゆを投なれば、心こころの水みづおのづからきよ
くなりて往生おうじやうをうる事は、念佛ねんぶつのちから
也。

法然上人御法語





秋風身邊に在り

吉田 絃 二 郎

わたくしの知人にシエフアードの權威者がゐる。かれは或日わたくしを訪ねて来て犬の話から次のやうなことを語つてゐた。

「僕は幾度か獨逸からシエフアードを購めたが、送つて来る犬も来る犬も氣が荒くて、癖があつて困つた。そこで最初は先方で、そのやうな癖のある犬を故意に送つて寄越すのであらうと思つた。しかし幾度目かに送つて来た犬は實に善い犬であつた。僕は迷はざるを得なくなつた。その後また幾度か犬を輸入した。その結果僕は次のやうな事實を發見した。それは日本船で送られて来た犬は航海中に氣が荒くなり獨逸や佛蘭西の船で送られて来た犬は癖がないといふことである。

何故か。それは船員の取り扱ひ方が不馴れな爲か、或は日本人の犬に對する惡戯などが犬を氣荒くさせるのではないかと思ふ。」

この話を聽いてわたくしは或る暗示をあたへられたやうな氣がした。日本の船員は世界無比の船員である。だから犬をいぢめるやうなことはないと思ふ。しかしこの話はわれ／＼日本人にとつて反省すべき示唆を持つてゐると思ふ。

日本の馬は猛獸であると言はれたことがあつた。こゝにもわれ／＼は反省すべきものを持つてゐた筈である。

わたくしは毎日犬を連れて散歩するが、たゞ通りす



がりの女や子供たちで、犬に對して「畜生ッ！」と呼び「いやな犬！」などと呼んで行く者がある。犬の持主としては實に不愉快である。犬自身としては一層不愉快であらうと思ふ。吠えもしないのに「畜生ッ！」と呼ぶ人たちの氣が知れない。

また子供たちは遠くから石を抱へて待つてゐる。

かういふ一部の日本人の動物に對する性癖は何處から生まれて來たか知らないが、ともかく小學校時代から根本的に改めてゆく必要がある。可憐な動物をすら愛することのできない人間に、何うして人を愛する心であらう。

秋の山に登れば小學校の遠足會に出逢ふ。引率者の若い先生は眞つ先に紅葉を手折つて山を下つて來る。

一本の木、一草の草をも愛する心がけなくして、何の教育だと言ひたくなる。草はあるがまゝに野に花を咲かしめよ。木はあるがまゝに山に繁らしめよである。

國を愛する人は第一にこの美しい祖國をさらに美しく尊くすることを考ふべきである。祖國の一草一木をも愛する慈悲心から出發しなければならぬ。慈悲心なくして何の愛國人ぞやと言はねばならぬ。

日本人は愛國心に富んだ民族である。しかしこの事變を千載一遇の機として開取引をする不心得者のあることをも知らなければならぬ。これは日本人全體の恥辱である。

×

パリに入つた獨逸の軍人がきはめて慙慙であり、親切であるといふ通信が新聞に載つてゐた。恐らくさうであらう。

日本の軍人は獨逸の軍人以上に禮義正しく、親切である。だから戰に強いのだ。

しかし日本人の俗吏の中には靴のまゝの足を卓子に上げて、人民に應待するものがある。軍人さんは親切だが役人の或者はといふ民衆の言葉をしばしは聴く、これも邦家のためなげかしいことであり、日本民族全體の恥辱である。

×

七月の二日に今年はじめの蜩を聞いた。武蔵野に住んでゐると、小鳥の聲、蟬の聲、渡り鳥の羽音



といふやうなものに、特に心を惹かれる。そして移りゆく季節のあはれさにしみじみとの思ふ心にもなる。

今年は雨がすくなかつたためか、このあたりでも田植がおくれてゐる。もう孟蘭盆が来るのに、まだ田植のすまぬところもある。

つひこのあひだまで毎日のやうに田に下りてゐた白鷺もこのころは田植の人の姿を恐れてか、あたりに見えなくなつた。鵲と行々子だけが葦の中に鳴いてゐる。鵲は時をりその黒い可憐な姿を葦の中の小徑に見せることもある。

しばらく姿を見せなかつた千鳥がまたこのころ多摩の磯に啼いてゐる。二三間先に下りて来ては、人が近づいてゆくと、さらに二三間先に飛んで人の顔を見る。千鳥は無心でやつてゐることだらうが、こつちには親しみを感じさせる。自然といふものは無心の裡になか／＼面白現象を見せてくれる。こつちがこまやかな心さへ抱いて自然に對すれば、自然は有心の人間言葉以上のものをさ／＼やいてくれる。

田のほとりの電線にはすでに渡り鳥の先驅ともいふ

やうな鵜が二三羽鳴いてゐる。

毎年八月に入れば武蔵野には渡り鳥が飛んで来るが鵜の聲にはすでに秋の寂しさが感じられる。昨日は田圃の中の蓮田の白い蓮がはじめて清楚そのものゝやうな姿を見せてくれた。一二反ほどの狭い蓮田であるが、毎年その白い蓮の花にだけだけがすがすがしい感じを抱かせられるか知れない。見わたすかぎりの青田原に數輪の白い蓮を見出せば尊い心にもなる。

X

孟蘭盆會の近づいて來るごとにわたくしは日本に生まれたことをしみじみとありがたく思ふ。

迎へ火を焚いて精霊を迎へるさびしさは耐へがたいことではあるが、遠い世界から年に一度立ちかへつて來る精霊を胸に感じるといふことはありがたいことだ。

かつて足弱の妻に草鞋を穿かせて山から山を歩いたことがあつた。浅間、榛名、霧島、阿蘇、燕、鎗ヶ岳、と、まだバスなどのないところで、一步一步草鞋の



紐をたよりに山に登つて行つたものであつた。

孟蘭盆會が近づいて來るごとに、わたくしは妻のそのをりの姿を思ひ出し、いつも仔馬のやうにわたくしの後から歩いてゐた賞笠姿のかの女を思ふ。

大方今日あたり遠い世界から歩一步現世への遠い旅を歩いてゐることであらう。

孟蘭盆の十五日の夜送り火を焚くころは一層耐へがたいものである。たゞひとり遠い世界に歸つてゆくであらう妻の姿を想像しなければならぬので。

送り火や佛の國のさぞ遠く

かの女の新盆に作つた句であるが、まつたくかういつた感じが今もつゞいてゐる。

×

多摩の墓にも、家の庭にも秋が咲きはじめて。

多摩の磯には川原撫子が咲きはじめて。

秩父から丹澤大山あたりの山の姿も日毎秋近く感じられて來た。

庭の辛夷の實も赤くなつて來た。

たゞひとり静かな秋の陽ざしを樂しみながら縁端に仰臥して、辛夷の實を啄きに群れ集つて來る渡り鳥の羽音や、秋風を聴く日も近いことであらう。たゞひとり生きることのさびしさと尊さを感じるのも秋だ。

(をはり)

浴衣

A「この間ね、羊の奴が突然僕に噛みついてね……」

B「羊が？ それで怪我は何うだつたね」

A「それは大丈夫、羊はスフの浴衣だけ食つたのさ」(新潟スフ子)

熱慮を要す

肥つた婦人「妾このごろやせたつて皆んなに云はれるの。貴方どう思つて？」
亭主「いづれ考へてから返事をしよう」

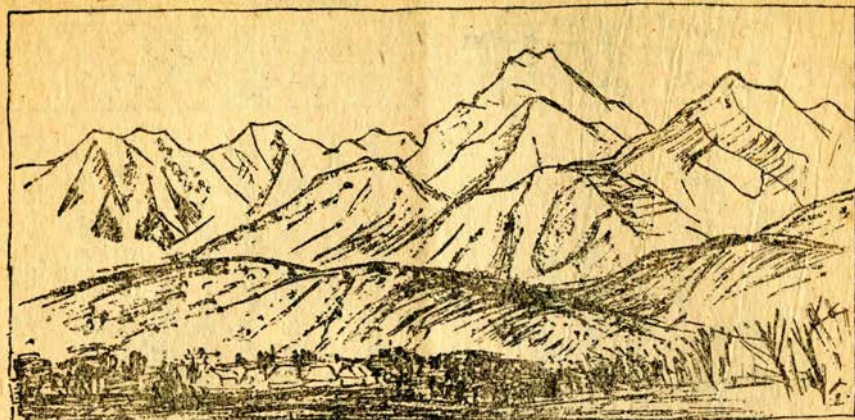
刷印

受引編輯

社刷印スデ工

工職の化文 雅著
美術印刷 事務用品 誌書
仕事さけ澤

五ノ四西座銀・東京
番八八七六の橋京



▽…富山縣の巻…△

はんごんたん

反魂丹のことども

—— 宗教地方色(二) ——

大日本青年團
編輯課長

増谷文雄

五月すゑから六月にかけて、私は、富山から岐阜へと歩いてまゐりました。その旅で、私は、昔なつかしい「賣藥さん」のことを、つゞさに聞く機会をもつことが出来ました。

富山といへば、わが國全體から言つても、有數の信仰の土地であつて、ことに、眞宗の信仰は、おどろく程にあつたものがあります。それらのことに就ても、私は、いろいろと話をきく機会をもつたのですが、わたくしの宗教的な關心をそつたものは、それらの篤信のかずくではなくて、却つて、宗教とはあまり關係のなさうな「賣藥さん」のはなしたつたのです。

富山の賣藥といふと、今でも、日本全國しらぬもののない程に有名ですが、その由縁について、あまり知つてゐる人もないやうに思ひます。わたくし自身も、今度、廣貫堂の常務

取締役の金尾義信さんから、詳しい話をきかされて、やつと「賣薬さん」の由縁の一半を知ることが出来たやうな譯でした。

金尾さんは、もと富山市の社會課長をしたこともある人で、今では、富山第一の賣薬會社たる廣貴堂の常務として納まつてゐますが、若いころには、自ら「賣薬さん」として、諸國に行商し、つぶさに「賣薬さん」の經緯をつんだ旅でありました。

金尾さんは、「賣薬さん」の由縁と誇りとを次のやうに話されました。

二

今からもう三百年も前のことです。

加賀百萬石、前田侯の一家で、前田正甫といふ殿様が、ここの藩主として富山城にをられたころのことです。なかなかの名君で、意を藩民の幸福にそそぎ、その被害になやむもの多きを見て、命じて薬をねらしめたのが「反魂丹」であつたのです。

この「反魂丹」をねつたものは、萬代淨眼といふ人で、もと備前岡山の藩醫であつたといふことですが、たま／＼富山に來遊



し、家傳の「反魂丹」のねり方を教へた因縁で、今日でも、富山賣薬の祖と仰がれ、妙國寺境内のその墓碑は、富山に杖をひくもの、必ず訪れるところとなつてゐます。

この「反魂丹」が「賣薬さん」の手によつて、全國にひろめられることになつたに就ても、面白い因縁はなしがあります。

ある時、江戸の城中、大廳間において、重要な會議の最中に、ある藩の殿様が急に病氣になつて打倒れました。それ藥だ、それ醫者だと大さわぎをするのを見兼ねて、正甫公が、印籠の中から「反魂丹」をとり出して服せしめたところ、たちまち起死回生の妙あらはれ、死坐の諸侯もみな驚嘆の眼を見張りました。

「前田どの、なんと申す妙薬でござりまするか。」

「是非とも、拙者どもにも御教示願ひたく存じまするぞ。」

といふ譯で「反魂丹」のいはれと藥効とを、正甫公がかいつまんで物語られると、諸侯は、異口同音に、それほどの妙薬を富山だけが秘するといふ法はあるまい、是非ともわれ／＼の藩へもお願ひしたいとの希望を述べたのです。

「では……」

といふので、正甫公が、歸國の上で賣藥行商を諸國につかはすことになつたのが、今の「賣藥さん」のはじまりであります。

三

萬代源藏翁の墓のある妙國寺の寺内には、源藏翁の木像と並んで、賣藥行商の元祖である八重崎屋源六の木像があつて、今でも毎年五月五日には盛んな祭典が行はれてをります。また、妙國寺のとなりの大法寺にも、賣藥さんの元祖のひとりの松井屋源右衛門の墓があつて、今なほ厚い尊崇をうけてをります。

正甫公が江戸から歸藩して、これらの人々を「賣藥さん」として選ぶに當つては、三つのことを條件とされたといふことです。その一つは家柄が正しいこと。その二は健康がすぐれてゐること。その三は人格が立派であること。この三つの兼ね備はつたものにして、はじめて「賣藥さん」に選ばれることが出来たのです。

だから「賣藥さん」になることは、この國の人々にとつては、光榮あることであつて決して恥しいことではないのです。達者なところに「賣藥さん」に出たことのある者でなければ、幅がきかないのです。さて、正甫公は、數人の賣藥行商を選出し、いよく行商に出發せしめるに當つて、彼等を御前に召して、自ら訓示をあたへられました。その中の二つの言葉を、わたくしは、極めて

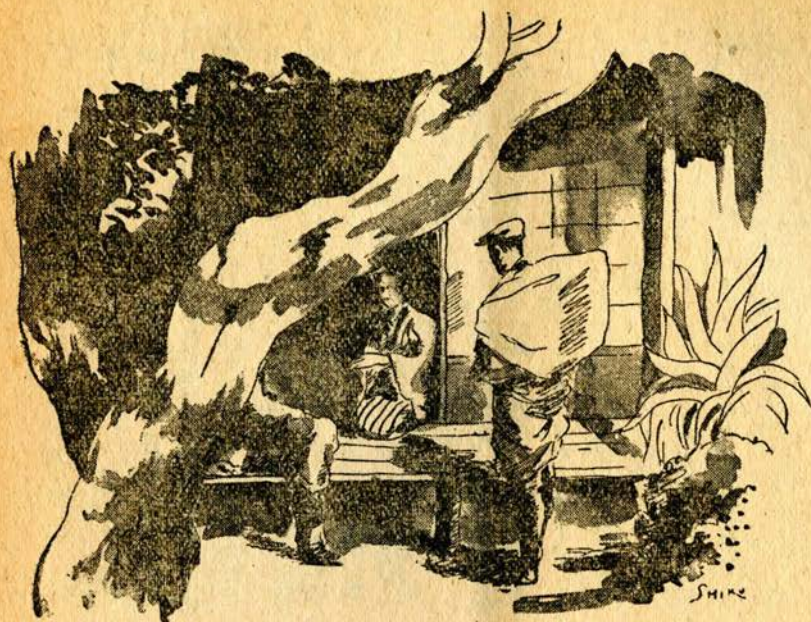
尊ぶべきものと思つたことでした。

その一つは、「用を先となし、利を後とせよ」といふ言葉でありました。「用を先となし」とは、諸國の人々の役に立つことを念頭第一のこととなすことです。「利を後とせよ」とは、行商は行商でも、利益をあげることは第二義のこととせねばならぬぞといふのであります。藥を賣るといふ商賣は、決して他の商賣と同じ考へ方であつてはならぬ。醫が仁術であるならば、賣藥もまた仁術でなければなりません。しかも、この賣藥は、諸國諸大名の諸招と、正甫公の大きな慈悲心によつてはじめられたものであります。その美しい動機を汚すことなからしめんためには、斷じて、用を先となし、利を後とすることを要するのであります。

正甫公のもう一つの訓言は「僻地を先となし、都邑を後とせよ」といふことであります。これもまた、打算を絶した、たつとい心からでなければ出来ないことです。

都會を行商してをれば、まわる家數も多く、自然、利益もまた多に定つてゐませう。僻地に入れば、一里あるいて二軒、二里歩いて三軒といふ具合で、能率のあがらぬことは言ふもおろかです。だが、一ばんこの賣藥を必要としてゐるのは誰でせうか。

町にすんでゐれば、醫者にも行けるし、思ふ藥を買ふことにも事缺かぬでせう。だが、山間僻地にゐては、さうは行きません。醫者どころか、藥を買うにも、おいそれとは行かない。「賣藥さ



ん」の薬袋をもつとも必要としてゐるのは、山間僻地にすんでゐ

る人々です。その切なる必要を先にして、自分の利益や都合は後廻しにする。それは結局、用を先となし、利を後となすことに他ありませんが、さうした行動は、一見やさしきに似て、なか／＼行はれ難いことであります。どこか、理想にあふれ、聖なる目的をもつてゐるのでなくては、到底實踐しうるところではありません。わたくしは、こゝに、確かに宗教的なものを感じることが出来たと思ひました。

さういふ聖なる目的、理想の下に出発した「賣藥さん」たちは、なるほど金尾さんの話を聞いて見ると、またそれに相應しい待遇も受けてゐたやうであります。

春のことで言へば、やれ關所だの、手形だのと、あの國境往來のやかましい時代に、富山の「賣藥さん」だけは、ひろく諸國を、手形なしで、自由に行商することを許されてゐたのです。これは、何でもないことのやうですが、精神的に考へてみると、決してさうでなく、「賣藥さん」の高い目的とその精神とが、ひろく認められてゐた證據であると思はれます。

「賣藥さん」か、僻地の村につくと、彼はよく村庄屋の座敷に通されました。そして、村の人々は次の部屋から、疊に手をついて、「はる／＼御苦勞さまでございました。どうぞ、わたくしどもにも、お薬をお頒ち下さいますやうに」と言ふのであつた。この待遇もまた、高い精神をもつ人々に對するものであります。

そして、さうした待遇の精神は今日もなほ残つてゐるさうです。わたくしども都會に住んでゐる者は、とかく「賣薬さん」に比べ無い挨拶をするのですが、僻地の人々は、決してさうではないのです。金尾さんが自分で経験された事にこんな話もあります。福島縣の山おくでのことです。金尾さんが、師の薬箱を背負つて、とある農家を訪れますと、そこには先客が二人ほどゐるのです。服薬や持物などから見ると、たしかに税務所の人たちらしく、おかみさんは何やらつぶやきながら、その一人に五圓札を手渡しするところでしたが金尾さんの姿を見ると急にその五圓札をひつこめ、改めて「賣薬さん」の前にさし出して申しました。

「あんた方は、また何時でも来てもらへるが、賣薬さんは年に一度のお客さんです。それに、お藥の御恩には、どうしても執るにやなりません。これは賣薬さんの方にまわしますよ。」

金尾さんが、どんな顔をしてその五圓札を受取つたかは聞きもしましたが、田舎の人々が「賣薬さん」を遇する態度は、よくこの話で知られると思ひます。そして、わたくしが「賣薬さん」の話の中に、何とはなしに、高きもの、聖きもの、宗教的なものを感じた所以も、わかつて貰へると思ひます。

四

大へん「賣薬さん」の話がなぐなりました、富山縣で、も

う一つ、秘の宗教的な關心をひいたものに立山があります。

名山と宗教との關係は、どこにでも存することですが、この立山もまた、濃厚に宗教色にいろどられてゐます。その理由は、富山大槓の上にでも立つて、はるかに立山連峯をながめやると、目からにして解るやうな氣がするのです。

立山は、標高三千米あまり、今日では、日本アルプス中の白眉「米雪の殿堂」としてアルピニストの憧れの山であります。が、むかしは、駿河の富士、加賀の白山とともに、日本三靈山と稱せられ、その山頂ちかきあたりには、一木一石も佛教にちなまぬものはなく、種々この傳説にからんでゐるのです。

富山では今日でも、一度このお山に登つて來ぬうちは一入前の若者として扱つてもらへないのです。最近まで行はれてゐたさうですが、青少年がはじめて立山のぼりを果して歸つて來ると「御冠服」といつて餅をついて祝ふといふ習慣もあつたさうです。

いまごろになると、富山市から蘆橋へと通じる登山道を行き交ふ人數も、次第に多きを加へてくるのですが、面白いことには、行く者は必らず、登山をへて歸つてくる者に對して、思はず道をゆずるのださうです。それには、疲れをいたはる氣もちもあるに相違ありませんが、その他に、行く者にはどうも、歸つてくる者が尊く障く見へるのだと、土地の人々が説明でした。そんな所にも山の神聖さがつき纏ふのかと、感じ入つたことであります。



京都市 望月久次郎

聖廟を長き迎へ奉りて
神ながら貴く尊き大君を辱けなさ
泣きてをろがむ

評

光緒ある紀二千六百年に當り、皇
祖を御葬野の爲め、聖廟を近邊に
進ませ給ふ。迎へてまつる民草の
歡喜いばくぞ。この一首は素樸と
その赤子の情をよく現はしたも
の、歌はぬものも、その心持に於て
は、この感故に旁らぬものを持つた
であらう

北條道 押野向秀

七月の簀鷹の鳴つりを憂ひ持つ
身も親しみて聞く

評

何か心に心配事があると云ふほどで
もないが、軽い憂愁があつて、樂し
まない、鬱々としてゐると、季節外
れの聲、しかも餘り聲のよくない簀
鷹が耳近く鳴り出した。作者はその
つくらない聲に、心中の憂悶を忘れ
たらしく云ふわけではないが、一時感
られて、明るい思ひをしたと云ふの
である

北支道連軍 古賀房雄

幾度か共に生死の境越えし戰友は
死にたりわれをのこして

評

聖戰に従つて、共に大陸の山野を闊

撃すること幾回か分らない、或は頭
丸飛雨の中を或は困苦欠乏の中を扶
け合はばまし合つて來た戰友ほど
心の結びついものはあるまい。そ
の友の一人がまた戰死した。殘され
た居ないが、實に臨場に出して歌つて
は居ないが、實に臨場が溢れてゐ
る作である

靜岡市 加賀喜代治

大陸の野山を攻めて我らいま夕餉
炊くと粉味噌解くかな

堺市 笠井松枝

青葉うつ雨隠きをればそのひまに
河鹿鳴くなり山の湯の旅

京都 福島孝治郎

弓張りの月しろきかな故郷を偲ぶ
旅舎の若きつはもの

茨城縣 伊藤 是る

大いなる朝の大氣をふるはせて祝
ふが如く矢車の咲く

熊本陸軍病院 松永松一

みいくさに病みて一しほ兒の戀し
まつしき中にさきく育てよ

小樽市 井口 眞

夕暗に香ほのかに漂ひてうす紫
に紫陽花のさく

北支道連軍 桑原吉男

饒饒と月牙え渡る北支那の夕べ還
かに故里想ふ

大阪市 森 正義

地下鐵の工事せはしき驛前に壁を
ひさく老婆のすがた

福岡縣 古賀長善

願くば吾が身に錦つけんますこ
やかにませ老い父父母

東京 藤林貞子

さみどりの空の雲さよ六月の日は
輝やけり大地に明るく

大分縣 丹羽誠子

母ありし郷をはるばる訪ねれば母
の愛でにし白百合のさく

東京市 づばき

眼さむればはや煩惱のおこりきて
今日のひと日を切なくぞ思ふ

城西縣 稲子

十歳ふり踏む古里の土黒く連なる
山の身近くにあり

北海道 中村 もん

奉仕日の人とは田畑に働きて眞晝し
づけし 難のなく

青森縣 丸尾 傳山

村人が磁力一致田を植えて秋のみ
のりを祈るうれしき

新潟縣 江八 年坊

人民は天を仰ぎて雨待てど五月の
空は澄み輝きつ

久留米陸軍病院 米倉 岩男

月の夜にそぞろ歩めば蟲の音のハ
タと止みつつわが影くろし

大阪市 山下 龍章

打水にぬれて涼しき境内にほのか
にほふ石炭のかけ

北海道 花田 顯佳

親しみもうらみもとけて孟蘭盆の
ひとつ蓮に供養うけてよ

栃木縣 大輪 清

竿たわみ重しと見れば鮎つれぬ清
き流れの水をきりつゝ

京都 堀 宗

守山の里は日暮れて野に山に鶯飛
ぶ交ふさまうつくしき

靜岡縣 一向 山人

合掌の興亞觀音伊豆山の山べにま
して衆生見たまふ

はがきに二回二首以内とし
「附士」欄都部歌壇係にて
に送ること

投稿規定



○ …… 記念日の感慨 …… ○

拜 ま れ た 氣 持

辻
重
光

お念佛唱えて
まつすぐ進め

待望の召集令狀を受取つた、幾ら覺悟と準備は出来てゐた積りでも、あれも、これもと色々と思ひ浮んで、仲々忙しい、目廻るしい、落着かぬ日が續いた。

これでは日頃の準備も、何にもならぬと恥かしく思つた。

未だ、あれも、これとも思つてゐる内に、愈々出發の朝となつてしまつた。

佛前に跪き、僅かな時間ではあつたがお覺悟を唱へる内に、あれも、これとも思つてゐる氣持も次第に消えて、佛まかせと云ふ氣持が強く感じられて來た、何んとなく柔かい、明るい氣分が私の全身を包み、私の體

が、何にか光を受けて透明になる様な氣がして來た。

そして忽然と今までに味つた事のない新たなる覺悟が沸きあがつて來るのを感じた。

それから、應答にいとまない程の多數の人々に對して、又萬歳々々の歡聲の中にも、不思議な位、いつも私の心の底は、氷でも冷されてゐるやうな、誠に落着いた氣分が續いた。

出發前、先輩、知友に贈まれた氣持は今に忘れない。又出發當日〇〇驛に向ふ道路は、狭いばかりに人々で埋められ、萬歳く、熱叫、熱涙を以ての歡送、又長い乗車中、

晝は日の丸、夜は提灯を打振り、通過するどんな寒村の人々に至る迄、夜も寝ず、我々の爲の熱誠なる歡送が絶えた所がなかつた。

我々は只々、この熱誠に答へる可く、立派に、戦はなければならぬと、口には出さぬが、誰でもが心に深く誓つた。

しかし、私はこの歡送の人々の中で或る老婆の姿を認めた時程、私の比較的靜かであつた心を、向一層に建直し、激勵を感じさせられた事は、かつてなかつた。

そして、この姿はいつの戦場でも思ひ出され今でも尙目に浮び私の心を震ひ起させる。それは、歡送の人々の中に、私は生れて始



めて、慨然たる姿で、手に珠數をかけて合掌し、我々に御苦勞様と、我々を拜んでゐる一

人の老婆の姿を見た時、私はこめかみがそえ立ち、心の眞中に櫛を打込まれ、鼻柱が痛くなり、全身に寒さを感じた。

私はこの時ぐらい、こんなに、自分と云ふものの大きな責任を深く感じさせられた事はなかつた。

私は充分、皇軍の一員として、儼く覚悟はしてゐたが、この老婆の誠意溢るゝ、合掌の姿を、目に受けた時は、むら／＼と一層の自覺を強くさせられた。

かく感じたのは、決して私一人ではなかつた、汽車に乗り込んでからの車中談に、「眞誠々々の歡迎には、全く張切る。しかしお婆さんに、拜まれた時は、何んとも云ひ様のない有難い氣持になり、責任を重く感じた」と戰友は話し合つてゐた。私は黙つて聞いてゐたが、誰の氣持も同じである事を知つた。

私は初めて、人から拜まれた時の

氣持を味ひ、それが胸中に燒付いて離れない、離れ思ひ出せぬが、合掌してゐる老婆の姿が、戦場にゐる時いつも、目に浮び、今でも心を離れない。その度に私は、なさねばならぬと云ふ氣持が沸き立つて来る。家を出發する朝、私が佛を拜んだ氣持、途中老婆に私が拜まれた氣持、共になさねばならぬと云ふ氣持が沸きあがつては來たが、私は拜まれた事に依つて、一層その氣持が強くなつた。

私は導き給ふ佛まかせで、自分の任務を完遂せねばならないと誓つた、そして拜れた事に依つて、より一層その誓を深くした。これを思ふ時、いつも私は震ひ立ち、佛を念ずる氣持が一層に強くなると同時に、落着いた氣分が、いつも私を包んだ。

一作戦が始まると、誰でもが心は動揺する、私も心が動揺する。しかし私は進む一步の歩調に合せて、念佛を唱へつゝ、敵に向つた。斯くする内に動揺も靜まり、落着いた氣分が私に、いつも戻つて來た。そして佛まかせの安心がいつも心に漂つた。

しかし、敵軍が飛來し初め、敵兵が眼前にちらつき出した時は、私は佛の事も、自分の事も、すべてを忘れ、私の頭は、あの敵をやつつけ、あすこを如何に占領するかのみに考へてゐない、だが全く文字通りの夢我夢中と云ふのではなく、心の一隅には確に比較的冷靜さがいつもあつた。そして目的を果し、成功した時に、私は有難いと思ふ氣持と同時に、佛を念ずる氣持と、お婆さんに拜まれた氣持が、いつも一緒に思ひ返された。老婆が我々を拜んだ氣持は、我々が今、かうやつて、元氣で出發してゐるが、やがては無言の凱旋、誠に氣の毒に、我々を拜んだのでは決してない。

お國の爲に私共に代つて本當に御苦勞様だと、誠に懇誠を心に持ち、秘密の意を越えた素直な感謝の純情が掌を合せ、妻になつて現はれたのだ。



第一線に向ふ將兵に又現に第一線に働きつゝある勇士に、誰でもが、拜む心は持つてゐる。

七月七日の新聞に、事變三週年を迎へ、我が國土の二倍半の戦果を収めた、偉大なる皇軍の威力の記事があり、その上に陣歿を鑑み、大陸の地を踏みしめる皇軍將兵の足跡のみの意氣がのつてをり、その下に「拜む足」と書いてあるのを、私は見て、一層その氣持に思ひ當る。只心の中で拜む人と、心と共に委に現はして拜む人があると思ふ。私は幸に熱誠溢るる心を體に現はし、その莊嚴なる姿に接し、愈々私の自體を深くされた、心の中で拜むなら、今一步進めて、體の上に現はして拜んだならば、拜まれた人は、必ずや、何にものか強いものを深く感じ受けると思ふ、長い間佛教が育つた日本人であるから。

又私はこの拜まれた事に依つて、私の拜む心がまへが、解つて來た様な氣がする。

従前もさうであつたが、今尙、私はお念佛を唱へてゐても、色々な難念が、入り代り、立ち代り、月にむら雲の様に、又黒雲の様に、かゝつたり、晴れたりする。これではと思ひ直しても、いつも日本晴の様な、純な、

澄み切った。お念佛ばかりは續かない、片々と浮ぶ雲の様に、又夕立をもたらす黒雲の様に、浮かんでゐたり、通り過ぎたり、消え去つたり、又青空になつたりする。

しかし、それでも私は少しも躊躇せず、屈

金魚屋の病人

山崎 善一

「どうだ、冷たくて、きれいで氣持が良いだらう」



せず、佛の導に依り、生きる喜び、誠心誠意、感謝の心がまへでお念佛を唱へ續ける。

私は只一度、真心を以て、拜まれた事に依つて、自分の大きな責任を感じ、なさればならぬと深く々々自覺を興へられた、つまらぬ私に於てさえかく感ぜしめられた。

ましてや、慈愛深き如來に於て、我々を導く事は寸分の疑ふ餘地はない。

私は佛の本願を確く信じ、我々を拜んだ老婆の氣持、その感謝の純情を以て、お念佛を唱へ、人を念じ、死を略して、なさればならぬ事に向つて直進する。私の置れた職友に代つても、なさればならぬ。

會員倍加運動

についてお願ひ

★本誌見本無料送呈★

拜啓 時下ますます御清祥の段慶賀に存上げます。本會もお蔭を以て愈々會運隆盛に向つてをります。これ偏に會員各位の御後援の賜と一同深謝いたします。

尙本會は時局下更に一段の發展を期し、新たな諸計畫に基き、時局進展の線にそひ、いよいよ本會所期の目的完遂に躍進いたすこととなりました。就きましては會員の倍加擴大が先づ第一でありますので、その趣旨を御諒承の上、會員十萬獲得を目標とする今度の倍加運動に御協力下さらんことを伏してお願ひ申上げます。

依つて會員各位の禮信徒並に御知友に御入會を御勧め下さいまして、皆さまの法然上人續仰會をこの上にも御後援下さらんことを幾重にも御願ひ申し上げます。

尙御申込み次第、本誌見本を無料でお送りいたしますから、必要な部数を御通知あつて同見本を他に御紹介の上、會員獲得に御活用下さるやうお願ひいたします。敬具

昭和十五年八月一日

法然上人續仰會々長 里見達雄

會員各位

子供にわかるお話

阿彌陀さま (二)

佐藤春夫



(二) 法藏菩薩の理想國

法藏菩薩は今一息で佛さまにならうといふ時になつて、自分が佛さまになつたら、どんな立派な國を開かうかと、一とほりでない思案をしました。その思案のために五劫といふとても長い時間がかかりつたのです。一たい一劫といふのは一つの地球が出来てからそれが滅びてしまふまで、つまり地球の一生といふわけで、法藏菩薩が思ひどほりの國といふのはどんな國であらうかと思つてゐる間に地球が五つ出来てそれが順々に滅びてしまつたわけです。法藏菩薩のお師匠さんはこんなに永い思案の間それを黙つて待つ

て、その出来上りに骨を折つてやらうと用意して居られたのですから、どんなに永生きしたお方であつたらうかと疑はれるのですが、何でも四十三劫生きて居られたと申すことです。佛さまといふのは人間の智慧そのものでありますから、天地のある限りは亡びないもので天地と同じやうに命の永いものなのです。それですから佛さまは五十年しか壽命のない人間のやうに性急ではありません。そのうへ、これ以上のものがまたないといふ程の立派な世界を拵へようといふお望みですから精一ぱい考へるのはあたりまへのはなしです。

たくさん佛さまが居られます。さうして、それぞれの佛さまはみなこの上なしの工夫を凝らし、ある限りの智慧

をしぼつて、みな思ひ思ひの立派な國を開いてゐます。法藏菩薩は今まであつたどの佛さまのお國よりも一番いい國がこしらへたいのです。それ故、今まであつた佛さまの國を一つ一つ見學してまわられました。佛さまたちの御旅行は汽車や飛行機の旅よりもまた一段と速いので、五劫の間

にはそれだけの大旅行をする時間は、もちろんたつぷりとあつたわけでした。法藏菩薩は行くさきさきの國々で大へん感心しました。さすがにみな佛さまのお開きなされた國だけあつて、どの國もみなそれぞれに美しくすぐれて居りました。さうして

金



それぞれに國の人々はみな喜び深く感謝して生きてゐるのを見ました。法藏菩薩は見て歩かれた國々の風俗や習慣や景色などのすぐれていいと思はれるものは一つこのらず覚え込んで置いて、それ等を皆ご自分の國でも採用したいとお考へになりました。つまりあらゆる國々を見學してその長所を残らず集めようといふ企てでした。なるほど、これならばどの佛さまの國よりも一段といい國が出来るのはあたりまへです。

法藏菩薩はたくさん國々を見て感心してゐるうちに、どの國にもみな大きな缺點があつて、その缺點だけは

どのいい佛さまの國でもみな共通のものに思はれました。

その共通の缺點といふのはそれぞれの佛さまがたがそれほ
どいい國をせつかくおつくりになりながら、その國の住民
になるためにいろいろとむづかしい條件をこなへてゐる事
は法藏菩薩にとつて非常に遺憾に思はれるのでした。むづ
かしい條件づきでなければ自分の國へ人を住ませないなど
といふのは人間並のけちな量見で、佛さまとあらうものは
そんな狭い考へではなく、誰でも自分のところへ來たいと
いふ人ならむづかしい條件抜きで好き勝手に來られるやう
にしなければなるまいとお氣がきました。

一たい人間といふものは間違ひをしでかしやすいもので
ある。誰しも間違ひをしたいと思つてゐる者はないのに、
つい何かの拍子に間違つたことをしでかしてしまふ。一つ
の間違ひがまたつぎの間違ひを産み出すのが人間の生活と
いふものである。これが人間の一番氣の毒なところであ
る。その人間に向つてどんな間違ひをもしでかさなかつた
なら自分の國へ入れてやらうといふのでは、折角のいい國
へ入れる人といふのはいくたりもないわけである。これで
は佛さまはみな物惜みをしてゐらつしやるやうなものであ
る。と、法藏菩薩はご自分がまだ菩薩になれなかつた普通

の人間のころの事を思ひ出してみてから、お氣がつかれた
のです。さうして、ご自分の心のなかでひとりごとを申し
ました。

「よし、自分のこしらへる國はありとあらゆる佛さまの國
でも第一等のものでなくてはならない。それにここへは
誰でも來たいと思ふ人ならみな入らせなくてはならない。
間違ひをたくさんしでかした人間は人間の生活のなかで一
番多く苦しんでその罪を生きながらに受けてゐる筈であ
る。それが死んでから後までどの佛さまの國へも行けない
ではあまりかわいさうだから、せめては死んでからだけで
もいくらからくをさせてやりたい。生きてゐる時の勘定は
生きてゐる間にすましてゐる筈だから、死んだものは誰も
彼もみな一樣に取り扱はなくてはなるまい」

法藏菩薩は先づかういふ大きな慈悲の心を感じましたが
「そんなことを言へば、それでなくても間違ひや悪いこと
をする人間がもう一さう間違ひや悪い事どもをたくさんし
でかすであらう」

「いや人間といふものはさうむやみと悪いことが出来るも
のではない。又悪い事をする間違へた氣の毒な人は、どん
なにきびしい掟や約束でも忘れてしまふものなのだから、



「一番氣の毒な出来そこなひの人間なのだ。」
法藏菩薩はかういふふうにいる自問自答して、はじ

めは人殺しのやうなあまりひどい罪を犯した人だけでは困る
のではないかとも思はないではありませんでしたけれど、
やはりそんな區別はつけないで誰でも差支へないといふ事
にきめて氣分がさつぱりました。

かうして、どこの佛の國にも入る資格のない人たちを自
分の開く國——この國こそあらゆる佛の國々の一番いいと
ころをみなとり集めた第一のいい國になる筈のところ——
へ迎へ入れようといふのです。

たとへて見ると一番いい學校をこしらへてそこへどんな
やさしい入學試験もメンタルテストさへなしで、それも月
謝さへとらないで志望なら誰でも入學させようといふので
すから世にも有難い話です。

あまり話が結構すぎるので疑ひ深い人間は、自分たちの
淺はかな小さな心でかんがへて見てこんなうまい話にはな
にかしん底にたくらみがあるのか、さもなければ話全體が
うそにちがひないと考へるのはまことになさけない事で
す。「親の心子知らず」といふことわざがありますが、「佛の
心人知らず」でせう。また「九尺梯子は九尺だけ」といふ

ことわざがあり、「英雄英雄を知る」とも申します。つまり法藏菩薩ほどえらくなくては法藏菩薩の大きな慈悲のお心はほんとに判る筈がないのですから、わたくしもなまはんかなことはこれ以上は言ひません。

ただ自分の智慧で判断できないほどの不思議な大きなお心のあるのを信じて、感謝することの出来る人と、それが出来ない人とこの二つの大きな區別のなかに、人生を幸福に生きる人と、幸福に生きられない人との分類がはじまるのだといふことだけを、よくおぼえて置いて貰ふことにしませう。

人の仕合せには貧乏も、金持も、えらい人もえらくない人もあつたものではありません。みなそれぞれに楽しみや苦しみがあるので、貧乏人が金持になりさへすれば世の中で困ることは何もないだらうと考へるのは浅はかな間違ひです。

金持には人にだまされてお金をとられるのではないだらうかといふいやな心配が、いつも心につきまとうてゐるもののやうに見えます。私の知り合ひにもそんな氣の毒な人がゐます。これはほんの一例ですが、同じやうにえらい人にはえらい人だけの特別な心配や悲しみがあるもののや

うです。

金持やえらい人にくらべて貧乏でえらくない人でも、すなほに物事や相手の人をいつも信じてよろこび感謝することの出来る性質の人には、苦勞も心配もその種がないわけです。

法藏菩薩は何人でもわけなく入ることの出来る一番いい國をこしらへるといふ今までどの佛さまも考へつかず思ひ及ばなかつたところに氣がついて、このひとつのことだけでも自分の國は今までの佛の國よりもすぐれたところがあると思ふにつけてもますますどの國よりもいい國をこしらへなければならぬといふはげみが生れました。

さうして、もういつでも佛さまになることが出来るといふ時に、師匠や先輩の佛さまたちの前に四十八の祈願をしました。

その四十八の願はそのことがみな成就しさへしたら、法藏菩薩のひらく國が法藏菩薩の理想どほりに出来る筈ですから、この四十八の願は言はば理想の國設計の簡條書きとも見るべきものでせう。(以下次號)



新編 山田 隆子

村芝居壯行會となりけり

評 村芝居とは秋の收穫を見極めて、土地の人々の行ふ芝居を云ふ。又芝居を願ひくるもある。此處では前者の場合である。

出演中の若者に召集令が下つたので、たちまち壯行會となつたといふのである。私も劇團中、一座員に召集令が下つたので、座員も観客も總立ちとなつて萬歳を唱つたのを記憶してゐる。非常に目新しい事實ではないが、聯想に富む句であると思ふ。

温泉の町に物賣る人の午寝かな

評 温泉客の爲めに土産店を出してゐる人が、日中の暑い候には買ひにくる人ともないまゝに午寝してゐるといふのである。此處では午寝してゐる人は一人のやうに表現してあるが、数人のやうにも思はれる。如何にも温泉場らしい風景である。

京都府 永田 七郎

鮎はぬる舟にゐて漣ひけり

評 鮎の跳ねる清流に舟を泛べてゐる

栃木縣 大輪 清

た作者は、うちよせてくる漣から鮎の

看をきいたといふのである。鮎の別名が香魚といふけれども、漣まで匂ふやうな事はあるまいと思はれる。そうした感じを抱いたといふのを強調したのであらう。鮎の横む清流の状態が偲ばれる。

大分 石堂 耕山

上簇の暇をグツスリ寝みそり

滋賀 森尾 山茶

雷鳴のあと静かなるものゝあり

東京 つか ばき

法隆寺參拜子規柿の句をしのび

柿いまだ若葉なりけり法隆寺

京都 鹿 宗 禮

音楽堂拍手のあとの扇子かな

八幡 森田 雄治郎

人が着るから我も着るなり夏羽織

東京 森田 法晃

腹見せて来る翡翠のひるがへり

廣島 八木 曉月

轉りに馴れて朝霞をしたりけり

廣島 八木 曉月

小樽 中村 茂樹

雪溪に見えかくれてパス走る

奈良 和田 翠心路

ものの葉の甘きかをりをや露の太る

滋賀 置野 ふみ子

水見する灯影のうつる田の面かな

徳島 丸岡 長壽

ぬれまじと傘の内なる牡丹かな

京都 福島 孝治郎

一人癒え一人臥しけり梅雨の宿

堺市 笠井 松枝

磯に來て岩にしみ入る日照かな

小樽 森 丸子

入梅となりてより身の弛みしや

大分 丹羽 無碍子

老鷺と白百合さげ母憶ふ

栃木 大輪 云海

鮒釣れて土筆の中に光り置く

山梨 程 原都谷

雨乞のたのみの雲の動き見る

大阪 森 正 頼

蝶ぬるゝたうもろこしの葉末かな

東京 神谷 のぼる

鳥立ちぬうねりくし風の麥

玉川 五 島 貴城

酒き上る泉に苔のすさまじき

玉川 五 島 貴城

滋賀 豊田 千代子

喜雨沛然青田も人も蘇がへり

大分 丹羽 無碍子

御佛の墓を藪ひ奇の花

大阪 山下 龍章

み佛に奏せてすよし老の挺

山梨 程 原一幸

座敷まで水を打ちたき暑かな

堺和田 田中 秋芳

矢車にかはるこたびの日の御旗

北海道 花田 順佐

波風はなしと思ひぬ夏の海

滋賀 青村 舞中

飛行機に唄を取られて田植かな

福岡 古賀 長 壽

梵鐘の音に明けいそぐ青葉かな

滋賀 谷上 賢二

五月雨の雨漏りの音夢心地

大津 田中 寸 草

初鰯やそる心の里こころ

長崎 池田 眞三

爽かに畔の朝を翹ふかな

長崎 池田 眞三

投稿規定

官製はがきに一回二句以内とし「淨土」編輯部併願あてに送ること



私の出逢つた

囚人の純情(續)

貴族院書記官

石橋徳作

戸締りを願ひます

このやうにして私は北海道から釧路まで全國の刑務所を殆んど全部講演して廻り、何時も「二錢地蔵」建立の趣旨と事故により愛兒をなくした親達の嘆き等について語り續けたが、そのために私の家には毎日のやうに出所者が訪ねて来るのであつた。

安部久吉(假名)は竊盜罪によつて宮城の刑務所で服役した男であつたが、刑期が満ちて出所すると、その足ですぐ私を訪ねてくれた。彼は先づ私の家を訪れ、私が不在であつたために當役所に訪ねて来たのであつたが、色々の話の末で、次のやうなことを私に話した。

てくれた。

「私は只今先生のお宅を訪ねたのですが、玄関から入つて聲をかけても家の中から返事がありません。そこで更に庭に越つてお呼びしても誰も留守のやうでした。私は止むを得ず勝手にお家にあがらうと下駄を脱いだ時にやつと奥さんが出て来られ、先生のお留守のことを聞きました。

私はすつかり前非を悔いて眞人間になつたつもりであります。しかしお宅のやうに他人が自由に入れ、そこに靴や洋傘が置いてあつて誰もあなといと、盗みたい氣持の起つて来るのを何うすることも出来ませんでした。勿論盗むのは悪いことで、私は盗みはしませんでし

たが、何故お宅では戸締りをしないのですか。取りたい者は勝手に取つてゆけと申してゐるやうに見えますが、盗まれれば矢張り御不自由なさるでせう。

それよりもつと大切なことは精神的の影響です。私達が刑務所で先生の講演に涙を流して感銘しながら、出所すれば、すぐ他人のものに手をつけたとなれば、先生の私達囚人についてのお考へが變るだらうと信じます。何うかお宅の戸締りはもつと嚴重にして、不心得ものに悪いことをする機会を與へないやうにお願ひしたのであります。」

供徳にも順序あり

	信	
實	仰	
話		

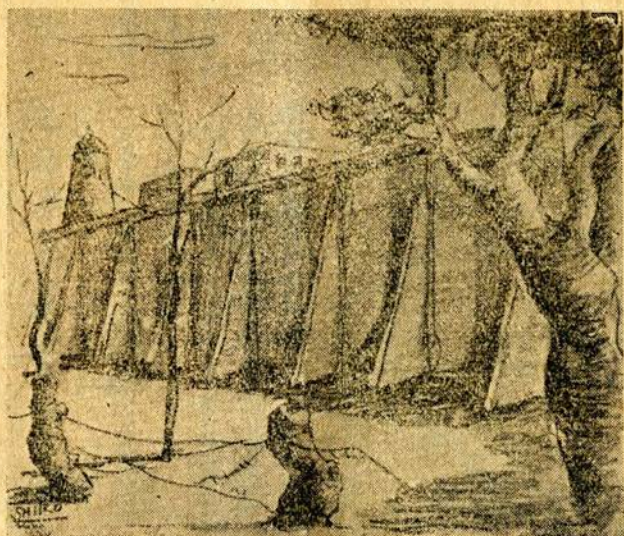
安部久吉の私に對する註文は更に續いた。
「又甚だ差し出がましいことで恐れ入ります

が、先生は毎日役所が退けてから變死者の出た家族を見舞つたりして、夜は遅くお歸りだと聞きましたが、先刻お宅にあがつた際に、奥さんの手が非常に荒れて血の滲んでゐるのに氣がつかしました。先生の各方面に見舞ひをしたり、講演旅行をするのは、甚だ結構な有難いことですが、奥さんの手があんなに荒れて苦勞なすつてゐるのを少しも考へずに家を空けることは何うでせうか。

私の妻は私の入所と同時に、子供を連れて離婚し、今もつて音信不通です。私はこれから滿洲に行つてみつもり働いてくる決心で、恐らく妻子にも再び逢ふこともないでせうがそれでも先づ妻子を勞り、家庭を立派に營むことが第一だと考へてゐます。

何うか先生も奥さんやお子さんを大切にし

てあげて下さい。出所して内地を去る私のたつた一つのお願ひです。」



安部久吉が私に向つて云つてくれたこの言葉は私に大きな感動を與へた。私は薄給の身の上で、家族のものには苦勞をさせてゐた。

妻は朝から晩まで私が外にばかり仕事をしてゐるのを援けてよく働いてくれた。子供にも節約を強いて餘り小遣もやらない。

そのくせ反面には私の家に来る乞食には出来るだけ施してゐた。毎日幾人もの乞食が来るので、大したものをやれないが、妻は「僅かですまないが」といひながら施してゐた。

これは確かに本末を顛倒した事柄だつた。家庭のものに苦勞させて、乞食に出来るだけ澤山に施すのは逆であつた。藁根を積み、供養を施すのにも、自ら順序があらう。先づ近きものから而して漸次遠いものに及ぼすべきであつた。

私は自分のことを省みて、順序を誤つたと考へ、それからは先づ家庭を第一にし、それから他に及ぼすやうにしてゐる。私にとつては安部久吉のこの言葉は何んだか「佛さまのお言葉である」といふやうに感じられるのであつた。

「何故回向せぬ」

●又或る日のこと前橋良一（假名）が突然に私の家を訪れた。彼は出所後に或る製靴工場に勤め、一心に働いたお蔭で常雇になれることとなつたが、それには戸籍抄本が必要で、偽名の使用が判るので、何んとか頼んで欲しいといふことであつた。

彼は初め運転手であつた時に、人を嫌き殺し、そのまゝ逃亡を企て、捕つた。この刑期を終つて出所すると今度は自動車を盗んで犯罪を重ねた。

私は彼に尋ねた。

「入所してから前非を悔いたなら、せめて嫌き殺された人のために追福を祈るとか、出所したら墓詣りをするとかしたらうね」

「それが實はルンペン風の老人を嫌きましたので、墓詣りするにも何處の誰やら判らぬやうなわけで、ついていたしませんでした」



「それはいけぬ。ルンペン風の人であつたら尚のこと、恐らくお詣りする人もない無縁の墓となつてゐるだらう。善心に遣つたといふなら何故墓詣りして回向せぬのか、さやうな心掛けだからこそ、犯罪を重ねるやうになつたのだ」

すると彼は眞垂れて久しく黙つてゐたが、やがて顔をあげながら、
「私が悪い御座りました。もう再び先生にこんなお願いは致しません。その前に立派な人間になつて参ります。」

と云つて、その日は歸つて行つた。

それから幾日か経つて、前橋良一が復私の家を訪ねていふには

「あれから心あたりを方々探し、附近の寺院を尋ね廻つて漸く墓が判りました。そこで心ばかりの供養を営みました」

と私に告げて悄然と立ち去つて行つた。彼はそれつきり来ないが、今頃は何處かで静かに正義についてゐることと信じてゐる。

純情の一瞬

或る日のこと、夜も遅く十時頃に一人の出所者が私の家を尋ねて來た。彼は田中能藏（假名）といつて、強盜殺人未遂で十五年の刑期を終えて來たものであつた。

彼は見るからに癡猛な顔つきをしてゐて、私に對しても何か威嚇するやうな態度が見えた。私はこれは大変な奴が夜遅く來たものだと内心不快に思つてゐた。すると彼は案の定、話し始めたこと程が甚だ機當を缺くものであつた。

第一に檢事を憎んでゐた。

彼に云はせれば彼の犯罪は檢事が作つたもので、無實の罪であるといふ。次には刑務所の者達を罵つた。彼は彼等に敵愾心を持つてゐた。更に彼は教誡師の悪口を述べ立てた。彼に云はせると教誡師は彼等犯罪者のおかげで飯を食つてゐながら尊大振つてゐるのは怪しからぬといふ。要するに彼の心はすつかり曲つてしまつてゐるのであつたが、丁度その時、私の妻が菓子を持つて部屋に入り來つた。

彼は妻の姿をチツト見つめてゐたが、何うしたわけか、突然に大聲をあげて泣き出した。餘り突然であつたので、私や妻は呆然として泣き叫ぶ大男を眺めてゐて、手の下しやうもなかつた。彼はしばらく泣いてゐたが、やがて涙をふきふき私に次のやうなことを云つた。



「今夜先生の所にお邪魔に上つたのは、實は先生が各刑務所を廻つて講演してゐるのも、先生の内職であると思つてゐました。所が今奥さんの姿を拜見して、これは失禮ながら大して富裕でない先生が、私達のために講演をして歩いてゐたことが、急に判つたのです。誠に申し謝ありませんでした。恐らく先生は夜遅く私が訪ねて來たのは、何か無心があつて來たとお感じになつたことゝ存じます。何卒お許し下さい。

まことに済みませんでした、済みませんで

した」

夜も更けてゐたのに彼は歸つて行つた。恐らく田中監獄は私の所に金錢の無心に來たのであらう。然しこの一瞬ほんとの人の心持に觸れてか、後悔の涙にぬれたのである。少なくともこの一瞬だけは、彼のやうな極惡人も善心に還つたものと思ふ。

この一瞬なりとも生れながらの善心に還つた時に、ほんとに指導してやる者があつたなら、彼のやうな犯罪人も救はれるものだと思ふ。犯罪者が出所して世間に出る時、溫い保護の手を必要とする。

彼等は出所する時は必ずや前非を悔いてゐるだらうが、世間に出て來ると彼等には何一つ職業が興へられない場合が多い。刑務所で長い生活を終つて出所しても、そのまゝ世間の仕事に役立つとも思はれない。彼等を正人として育てるものは、溫い手があるばかりである。

戎 じゅう衣 い

の

言 こと葉 は

召さるるまゝに

和田眞澄

内地和田眞澄

北支渡邊明道

中支安田秀賢

南支千々和英雄



であらう。これらの人々が作る記録が、やがて歴史を作るのである。歴史とは、ついに流るゝ記録であつた。

私は数日の後に、いかめしい軍衣につままれた屋一つの被褥兵となつた。家庭の事は清算し、思想は洗ひ流して、厳やかな軍紀に生くる身となつた。不思議な因縁と云はうか、一つになつた同じ班の人々と戦艦の彼方を語つて血を湧かす日が多くなつた。或日、中隊長殿から銃を授けられた。——これにお前達

は命を托するので、お前達は、この御紋章のある銃と共に死に、共に生くるのだ——やがて其の簡潔な、厳肅な式は終つた。兵隊は皆、

山莊の静かな闇を破つて電報が來た。一瞬はげしい精神の嵐がすぎて、第一番に心のつと奥底より甦へて來たものは「私も之で一人前の男になつた」と云ふ喜びであつた。初めて胸にかける赤襟の裏々しさは、自づと乙女らしい恥かしさが感じられた。海の外に遙かに瀕海と考へてゐる大陸が、急に目の前

の原野として連なつて來た。これでも、大君の爲めに東亞の曙の一礎石となる私の生命であると思ふと、いとしくも嚴肅なる自覺が測々と私の心を衝く。胸のいと深き神殿にかゝげられた聖火は、次第に其の輝きをまして來た。召されたる益良夫達は、自から驚く此の生命美に、甦へて欣然として馳せ参じた事

手に渡された新しい銃を握つて極度に心の緊張を覺へた。やがて渡支も近い事であらう。遙かに思つた大陸のアノ黄塵を踏む事も、もう遠い事ではあるまい。此の銃と共に俺達は何んて死んで、そして生きるのだ。逞しい意欲は、更に新しい銃を撫でて瘡の御紋章にさわつて見た事である。

それから毎日げいしい訓練がはじまつた。砂塵を浴びて、汗にまみれて、其の銃を握つた。心の緊張から勿論誰一人として不服など云ふものはない。大隊長殿が「出征時の感激を想起して、負託の大なるを銘せよ」と語された。そうだ、私達が郷土の人々に、親しき友に、心から囁まされて入隊した時の、あの所謂「旗の波」を想ひ起して、齒をくひしはつて頑張つた。そのうちに、同じ班の人が一人、病氣になつて陸軍病院に送られた。その戦友は、涙をのんで、自からの不覺を恥じて病床に身を運んで行つた。そして又一人、又一人、病院に行く人がふへて來た。其の頃、自分にも體の不調が極度に感ぜられて來た。併し自分は、精神の緊張で此の峠をもちこたへ

標とつとめた。かねて自分は幾度か雑誌、ニュースで皇軍の「莊嚴なる精神力」なるものを知つて居つたからである。けれども併し、熱が三十九度七分になつた。もつと出た。深く自から恥じながら班長殿に訴へた時に、班長殿は説教の手續をとられ、そして新兵を二日休んで、秘も終に病院に送られる身となつた。その時の心は、何とも口で云へない暗い悲しいものであつた。同じく入隊し、共に生死を誓ひあつて、衆命の大陸を夢みた同じ班の人々と別れる事は——、そして考へて見れば、若しそれが戦友達の士氣に影響する事があつては、と云ふ事である。一人の個が不注意にも破れる事は、其のまゝ、全體としての破壊をまねく事であり、個人の使命を完全に遂行する事が、其のまゝ、全體としての完全性をあらわす事であるからである。兵、個人が力の限り最努力する事が、やがて皇軍全體としての完全相をあらはすからである。日本兵の兵隊の強いのは、一人／＼が命を捧げて死

地に飛込んで行くからである。皆揃つて、此の覺悟で飛込んで行つた時、皇軍は強い一つのかたまりとなるのである。——色々の感情と思ひが複雑に交錯し、自然と涙が湧いてきて、自分一人が殘されてゆくこと云ふ寂しさで切であつた。

それから療養の生活が始まつた。同じ室には大體に二年、三年と戰つて來た人も居つた。いた／＼しい名譽の戦傷の人も居つた。秘達は毎日／＼醫務に心がけ、讀書して、大隊の戦友達の事を語りあつた。還送の戦友は胸を撫し乍ら其の傷も忘れて、大別山程のはげしき戰を語つた。思ひ出した病室の戦友達は、お互に命を賭した其の瞬間のはげしさを語つた。「不思議に命ならへた」これは其の人達の口から漏れる眞實の言葉だつた。そして、白衣褂かに讀書と思索の毎日を續けて居る。又、病院で、あへなくなつた人の極を添へる日もある。軍醫殿、戦友、看護婦の眞白な病衣の跡が悲しくも其の英靈を送つた。慰問の講義に、乙女達の演藝に凝しき想出を盡めた。

誰の胸にも「又来る日まで」と心に誓ひ、これから再び笑ふ日までつとと療養を續けてゆく事である。

青葉を渡る微風が白衣に響く、ともすれば沁みゆく、涙にうるむ想ひを慰めてくれる。運命の波のうねりが、どの方向に流れてゆくのか總てわからない。總て「因縁」と思つた。覺悟はして居つても思はざる召集に、そして



大 歡 喜

渡 邊 明 道

張り切つて捧げたこの身が今、白衣の寂しき笑ひを味はなければならぬとは。皇軍の逞しき進撃を聞き乍ら、力なき身に、溢るゝ若さの血潮をどうする事も出来ない。戦友よ。たまらなくなつて、泣いて鶴んだ。

(仙臺陸軍病院にて)

眞赤な太陽がすばらしく太く地平の彼方へ没しようとしてゐます、此の太陽を見たその瞬間!!

まるで電氣にふれたやうに、世界は沈黙の中に轉じ、物音は耳を遠ざかり、物みなは神々しいまでに美しく、唯一つの太陽の光に依つて一身も心も洗ひ流し清めるやうな心地がし

ました、大陸に居れば、一日の此の一時をどれほど尊く感じることでせう。

吾知らず合掌し、念佛するのです、われ／＼が意識するとなしに依らず、太陽の恩恵を、むかしからうけつゞけてまいりました。

それに氣のついた時、唯感謝の外は何もの

もありません、これこそ何ものにもまさるよろこびでなければなりません、大陸へ来て初めてこの氣持ちを味はふことが出来たやうな氣もします。

統後のみな様が、父母が、兄が、いろ／＼慰問して下さいます、その二文字、一品に、國と云ふ血潮の流れをしみ／＼感じます。

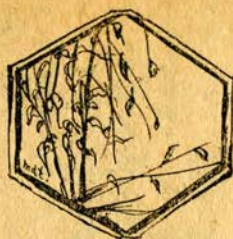
自分達は、大君のみ親のもとにあつたりたる子等であると云へるでせう、われ／＼はどこまでも大君のみ盾となりて散る。覺悟が必要です。

みなさま、お念佛は即ち自分を投げ出した赤襟のまゝに、大いなるものに生くる喜びを知つた時、自づから口をついて出るものなのです、尊い尊い無二の喜びなのです、それこそ、生死を越えたる大歡喜と名づけることが出来るのです。

初私達は毎朝々々この大歡喜に感激し、その日一日の激しい軍務に突進します。

斯うして大歡喜の中に大きな生命を見出し、それを氣のついた時、唯感謝の外は何もの

(北支戦線にて)



骨肉にめぐり逢ふ

安田秀賢

悠々五千年の支那の歴史を秘めて長江の流
れは無限に續き、星のまばたく夜空の下には
荒涼たる山野が展げる。

その頃、私は小隊長田邊中尉の傳令として
××野戦病院にあり職務してゐた。この病院
には同じく各戦時に武功をのこして、遂に陣
頭に倒れ、今は襤褸に努めてゐる人々が幾人
かゐるが、夜になると、この人々と私は、
色々な話題を拾つては、話はずんで夜の更
けるのも知らない有様であつた。

一本のロソクを中心に、あの神祕の扉を
開くやうな赤い灯の光を見つめて、在りし日
の戦闘を、そしていま戦ひつゝある戦友のこ
とを、大陸政策を、時局を、統後を、悉く
話し合つた。その中でも、キリスト教の少し

尉とは、お互の立場から議論俾仲して、相違
らない。又甲府出身のA中尉は平素からとて
もの讀書家であつたらしく、西歐の哲人中、
ひときわ目立ちて、戦時秀峯の偉觀たる、カ
ントの哲學を論じ聞かされ、ダンテの神曲、
ゲーテの若きエルテルの悩み等についての畫
きぬ蘊蓄に私はたゞ聞き入るのみであつ
た。それでも、甲府に住まれる、大善薩の
作者、中里介山氏の、獨断力行のお話に、一
同が眞に傾聴すべき事柄を見出した。

この野戦病院に在る時は、よく秋雨が響る
やうに降りそゞいでゐた。雨の夜、遠くにか
すむ贗山の町の灯を指して、私は、淨土教澤
流の地、白蓮社の結社、慧遠の白百合のやう
な高僧の念佛者の山僧生活を、癡りなくお話

した。

嗚呼、靈峯、贗山を招呼のうちに、淨
土教を語る、こんな美しい夜の感激のひとつ
きを、與え給ふたみ佛に、私は、全身全霊が
わななくやうな嬉しさにむせんだことであ
る。耳傾け給ふは神々しい白衣の人達、語る
は戦塵に血浴るる、戎衣の私、實に、時と所
と人と、得たものと思ふ。

そんな床しい病院の日も過ぎて、私は、
命に依つて、×國の××病院に転送せしめら
れた。

その後ある日のこと公用で、曾ての病院の
事務室を訪問したのだつた。しばらく待つて
ゐる間に私は、壁に張られてある病院の職務
一覽表を何気なくみてゐた。スルト、主計中
尉熊田高樹の名前が見えた。私は、ハッとし
た。何故なら熊田高樹君は、私とは同郷の故
早出身であり、骨肉を同じふせる従兄弟の間
柄であつたからである。

かねて、熊田君の應召せることは、伯母さ
んからの軍事郵便で承知はしてゐるが、今で

は管下も違ひ、部隊も相違し、かゝる野戦病院に勤務してゐたとは想像も出来ない。然し然し、骨肉の情の不可思議をこの時ほど痛切に味はひしことはない。明瞭せる私の感情は戦く聲に、その事務所の人に、熊田高博君に面會して欲しい私は安田といふ者ですが、若し、人が違つたならお詫びすればよい。と思案して、ホゾを決めて、お願ひすれば、一入の兵が、早速に、經理室に飛んで行つて下された。しばらくして、寢急ですが熊田さんは今お見えになりません、との答へ、私は、スグ、其處を出て、グル／＼あの廣い病院の中を遡ね歩いたが駄目、トボ／＼と元の事務所の前までくると、向ふから、一人の士官がツカ／＼と走り寄つてきて

「秀賢サント」

「オー、高博サント」

アー、何んといふ大きな夢の實現であることか、果て知らぬ支那大陸の地に、こんな奇蹟的な會見を得やうとは。熊田君は、私の身體を抱へるやうに經理室に連れてゆき、膝つ

き會はして泣いて仕舞つた。

際度、この時、神戸、禮堂、の君主人夫婦が、戦地への×用で、この室に居られて、私達の奇遇を凝して喜んで下された。が、私には別に公用を帯びてゐるので、又の再會を約して歸りかけると、それではと、熊田君も、直ちに武裝して、××少佐も公用で××へゆかれるから、××車に便乗して私も送つて行くとて、三軒のりどころを送つてもらひその日は別れた。その後、私も度々に會ひ、色々の話もし、高博君は名古屋高師出身など



戦地の「浄土」

千々和英雄

で、得意の××易論を説き、この會見を故里の人達はどうなに驚くだらうかと快笑し合つた。

戦線に立つて以來、こんな力強いことを感じたことも無かつた。そしてお互に、戦地に在る身、若し死んだなら、こんなことも家族に語して欲しい、又、どちらが先に武運に恵まれて歸還したならば、すぐ、色々の話しを家族に聞かそうとお互に約した。

(中支戦線にて)

聖戰参加以來既に三星霜、中支、敵支と戦、其間三〇幾度かの戦場に於て我愛する兵士等と幾度か死生の擲を彷彿して參りましたが不思議に途は開かれ、今に至るまで微傷だ

に負はず聖戰目的貫達の爲精進させて貰ひて居ります。是全く御神佛の御加護の然らしむる所と深く感謝禮拜致して居ります。

戦友相互の親身も及ばぬ思ひやりの友情、

上級者と下級者の生死結託した美はしい剛結
力、それは旺盛なる或靈精神となり靈性的精
神となり所謂大和魂の發露となつて上下一
置、凡ての困難を突破してゆく所に軍隊生活
のいゝ所があると思ひます。

不幸にして敵艦に墜れるや愛する妻子、年
老いし父母の事にも觸れず笑を含み従容死に
就く敬虔な態度には全く拜まずに居られなく
なります。

激しい戦闘間不幸敵艦に墜るれば遺體は戰
友が是を擔ぎ夜になり敵と交戦中其寸暇をさ
き、近くの支那民家に火光を防ぎつゝ中隊長
以下全員若しくは幹部のみ集り、彼の功を讃
へ死を悼み、悲しくも涙の中に茶火に附しま
す。悲しみの涙に火はゆらぎ、思はず合掌す
る者、すゝりなく者、誦經する者等、戰場と
は思はれない莊嚴な場面であります。最も親
しき者、火の側に通夜をし翌朝幹部一同御
遺骨を収め又次の戦闘へと馳せ參ずるのであ
ります。

又無言の戰友我軍馬にして不幸戦地にて倒

れたるものは、中隊全員集り懇ろに纏りタテ
ガミは持ち歩き長く駐留する土地に於て靈
と共に懇ろに墓標を作り香華をたむけ弔らつ
てやつております。そして毎朝清浄な水、御
飯、慰問品の菓子類が絶えることなく捧げら
れて居ります。

そればかりでなく、支那軍無名戦士、憐れ
戰ひの犠牲となつた家畜類に至るまで懇ろに
墓標を建て弔つております。

兵の長となり部下を亡くした時の心境は、
實に例へ様の無い淋しい強い責任感に打たれ
ます。

又自分の射つた彈丸に墜れた敵兵の事など
考へる時、それは私利私慾を充さんが爲の行
爲でなく當然やらねばならない務とはいへ、
何となく大きな罪を犯した様な氣持で一杯に
なります。あゝ拜まねばならない、弔つてや
らなければいけない、修養しなければいけな
いと心の底から湧き起つて來る何物かがあり
ます。

前述の如き事情からして家族の者より時々

修養書を取り寄せ朝夕禮拜修養し、又部下の
精神教育の資材として色々務めております中
戰友間にも信仰に志す篤志家も出で、是は
「淨土」最良の書なりとして、早速貴會に御
苦勞かけたわけであります。届けられた淨土
は早速採擇し誦話の資とし、又篤志者に鑑覽
をし精神修養、信仰雜誌として最も珍重せら
れております。敵支の果にも、こうした美は
しい淨土信仰の集ひのあることを御承知下さ
い。

(南支戦線にて)

岩野喜久代女史編

空中艦隊

會員岩野喜久代女史は事變詩歌集「空中艦
隊」を編輯發行せられた。同集には海軍大佐
市克利之助、海軍一等航空兵曹關根實兩氏の
現地にあつて詠んだ陣中詩歌が收められてゐ
る。(非賣品、編輯部)



短篇

あしたは天氣

楠 あきや

「兄ちゃん、さよなら!」

去年の今頃、治平が町の伯父に貰はれて行く時、變じて行つた聲が、正平の耳には、まだ判然と残つてゐる。

貰はれて行く事が、どんな事か知らないのか、元氣に、笑ひ顔さへ見せて、家の前から、はるかに通じてゐる田圃道を、振返り振返り去つて行つた姿も、判然と、眼に浮んでゐる。種付けられたばかりの田圃には行儀よく三十握ばかりに伸びた稲が、心地よく、風になびいてゐた。

半軒ばかり先の延命寺の衰微に、治平達が見えなくなると、父はこう言つた。

「治平は、幸せもんだ。東京へ行きや、美味いもんが澤山食へるし、いつも綺麗になつて

居れるもんなあ——」

と。
だけど、其の言葉の裏には涙が含まれてゐた事は、十三になつた正平には、よつく察せられた。

それに、妹の千代と三人で、火のない爐端に坐つて、あたりが暗くなるまで、治平の話を、しつとけた事でも、父の心はよく解つた。
父は、こんな話をした——。

治平は、剛情つばりりで、負けず嫌ひだつたつけ。五つの時だ。その年は、村に赤痢が流行つて、何處の家でも、生物を絶對に食べぬ様にした。治平は、母から、止められてゐた汲置きのかめの水を呑んだ。夕方田圃から歸つて來た時、姉の、千代からそれを聞いた

父は、今後の見せしめのために家から四軒程、離れてゐる、町の避難院へ行けと命じた。赤痢に罹つたものと信じた治平は、淋しそうな顔をして、言はれるまゝに、寝巻を入れた、風呂敷包を竊に背負つて、たつた一人で、夜道を避難院に向つて歩いて行つた。

取返しつかない悪い事をした觀念の覺悟を定めて――。

千代は、言ひつけたその結果の、あまりにも悲惨さに治平の肩を抱きしめて父に泣いて詫びたが、ゆるされなかつた。一人暗い道を、五つの子は歩いて行つた。

通り過ぎる人毎に、道を尋ねては、歩いて行つた。三軒程歩いて、向ふの丘に避難院の電燈が見える處までやつて来た。丁度後から自轎車で追ひ抜く人があつた。

治平は、

「あれ、避難院か、？」

と、尋ねた。

その人、その自轎車の人こそ、後から見えかくれつて行つた父だつた。



父に連れられて歸つて来た治平は、お燈明の上げられた、お佛壇の前に坐らされて、お爺さん、お婆さんに、お詫びをして、御膳を

小さい事に頓着しない、あつさりして、温順だつたの、」

と、父はまた、語しを續けた――。

治平が六つの暮れに母は、四十四で亡くなつた。

亡くなる時に、延命寺の方丈様に、来て頂いて、お十念を授けて頂いた。そして安心して死んで行つた。一人々々後の事を、注意して、お念佛の中に静かに、死んで行つた。

治平をも、枕邊に呼んで

「皆んなの、言ふ事を、よつく聞いて、障い人になつてね……さあ、お母さんのために、お念佛を唱へておくれんよ」

と、かすかに言ひ聞かせた。治平は、眞剣な、空気を、感じてか、うなづいて、きちんと、かしこまつて小さな手を合せて、皆んなと一緒に、いつまでもく

「南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛――」

と、倦きもせず、唱へて居た。――その夜母は亡くなつた。勿論、治平は、寝てゐて知ら

呑んで許して貰つた。――
「ほんとに、強い子だつたの、ん。それでゐて、



「あんな奴こそ、偉くなるかも知れんぞ。だけれど、一端、ツムジを曲げたと來たら、たまらなかつたのん。ハ、ハ、ハ、」

と、父は、手に餘つた剛情を思ひ出して笑つた。

それから、それへと、治平の事が、思ひ出されて三人が、夕飯に取かゝつた頃は、日の永い初夏も、すつかり夜になつてゐた。

それから、正平は、背戸の、いつも治平が登つて食べてゐた枇杷の木の下へ出た。もぎ残されてゐる實を、一つとつて口に運んだ。甘ずつばい汁が咽喉を通つた時、張りつめてゐた、胸が、ゆるんだのか、

「治平!!」

「治平!!」

と、叫ぶと、大聲あげて泣いてしまつた。

螢が飛んで、星のこぼれる様な夜だつた。

あれから、一年と少し経つてゐる。明日か

ら月遅れのお盆だ。暑い八月の太陽と、山の彼方に沈んで、涼風が青い田園を撫で、吹いて来る。父と、正平、千代は、おしよる棚を飾つてゐる。

「明日は、治平が来るぞ、お母さんの新盆でなあ——」

と、父の聲は嬉しさうだ。

「なんでも、洋服を着て、立派に、なつたげな……」

千代は、花立に、お花を、挿しながら眼を丸くして言つた。

「治平に、何を、御馳走するかん?」

「冷い、うどんが、すきだつたのん」

三人は、一生懸命だ。

お空には、星がこぼれる様に一杯だ。

「あしたは、天氣だ! 治平が来る」

線先きに、岐阜提灯を吊つてゐる、正平の聲は、ほんとに嬉しそうにはづんでゐた。

螢が、二つ三つ、亂れて飛んでゐる、靜かな夜だ。

(福田 勇畫)

なかつたが、翌朝起きてからそれを知つて、
「お母さん——」
と、母の體にすがつて泣きさげび、人々を泣かしたつけ。



是非心得て欲しい初期の

子供の躰けかた

東京府青山師範学校
附属小学校主事

阪本 一郎

エドモンド・ゴセの児童期の追憶に次のやうな一節があります。

——私は父親を全知全能であると信じてゐました。また父親の行は、すべてに正しいのだと思つてをりました。ところが或る時のこと、私はやむを得ず、父親に嘘をついたことがあります。當然いつものやうにその嘘は何もかも知つてゐる父親には役に立たず、自分の辯護にはならぬと知りつゝでまかせを言つてしまつたのであります。それに、父親は、その嘘に氣が付きませんでした。そして覺悟してゐたお目玉から、すつかり免れることができたのです。その時から、私の父親に對する考を、

改めねばなりませんでした。父親は、しんじつは全知全能ではない。私の力で父親に隠すことができる世界があると知りました。奇妙な考へですが、私は、私の身體の中に、私ともう一人の腹心の友とが住んでゐて、此の二人だけが秘密を知つてゐるのだと感しました。

このやうに、一面には私は私の父親からはなれた孤獨感に寂しくなるのであります。たが、また私は、私の胸の中に一人の同情者を見出し、したので、大いに安堵したわけでありました。

この記録は、幼時における自我意識の發生を物語るものとして、まことに面白い資料で

あります。

父親が全知全能であると信じてゐた此の子供は、また、母親にも同じ氣持であつたはずで、乳幼児の頃には、母親と子供とのつながりはきはめて緊密でありまして、二人はむしろ一心一體のごとき相をとつてをります。子供にとつて、自分の生活空間はそのまゝ母親の生活空間であり、自分はまた母親と一體であります。欲しい物があれば母親が與へてくれます。痛い處があれば母親が手當をしてくれます。厭な事は母親がしりぞけてくれます。母親の行動は自分の行動の延長であります。すべてが自分の意欲のまゝに動いてゆくのであります。自分以外に自分を律するもの

はないのであります。

このやうな時期には、自己意識をもつ必要がありませんが、世界のすべてが自分を中心に運行してゐるのですから「自己にあらざるもの」と自己とを區別する必要がないわけであります。

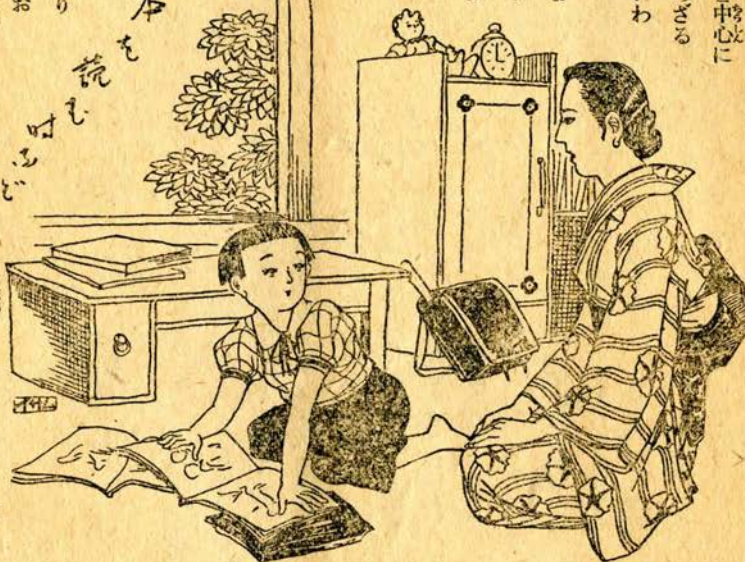
— 子供供の儀かけ —

しかし子供がおひく成長いたしますと、「自己に屬せざる世界」を發見するやうになります。火鉢には觸つてはいけません。階段には上つてはいけません。兄の玩具では遊んではいけない。かうして「いけない」と禁止された世界と、自由をゆるされた世界との限界がだん／＼強く意識せられてまゐります。そしてその限界を興へるものは母親であり、また特

本

に「よく父親が之を興へます。以前は自分の延長であつたものが、自分に對して禁止の命令を出すのであります。かくて、そこにしば／＼衝突がおこることになり、衝突が起ると自己と自己に

あらざるものとが對立するやうになるのであります。この時期から、子供の躰がきはめて



い子供だからと言ふので、甘くしますと、禁止が禁止でもたなくなります。

「それはいけません」と命じながら、子供がさがみますと、「では今度だけですよ」と許します。この間も汽車の中で隣りの人の食べてゐるアイスクリームを欲しがる子供がゐりました。

「あれは大人の食べるものです。子供が食べるとボンボンが痛くなります」と母親が言ひ聞かせました。子供は聞きません。大聲で泣き出してしまひました。

「お家へ歸つてお父さんに訊いてから、買つて上げませう。」

となだめてゐるうちに、今度は向ふ側で食べてゐるバナナを欲しがりました。泣いて駄々をこねますので、その向ふ側の客は、見かねて、バナナを一本「ほら坊やに上げましよ」とさし出しました。

「ありがたう御座いますが、子供には食べさせないことにしてをりますので」

その母親は辭退しました。大勢の見てゐる

むづかし、また大切なものとなります。幼

前で、これだけ親に徹底できるのは偉い母親だと、私はつくづく感心したのであります。普通ならば、たまに汽車に乗つた際でもあり周囲への気兼ねもあつて、「今度だけ」の例外を許すのが一般だと思ひます。

しかし一度の例外は必ず二度の例外を引きます。たとへ少数の例外でも、子供には非常にうれししい例外でありますので、強い印象を残すのであります。このことは、兒童に、自己に屈せざる世界を知らしめる妨げになります。兒童を、何時までも、自己中心の生活に停滯せしめ、我儘な暴君に育ててしまふのであります。その時になつてから教へても、もう遅いのであります。

餘談にわたりましたが、子供にとつてかかる禁止者としての父親や母親はこれらの生活空間の全面にわたる權力をもつてゐるものであります。全知全能であります。ところが最初に掲げた例のやうな、ふとした機會から子供は親の知らない秘密を持つことを意識しはじめるのであります。いままで一體であり、

もしくは全面的支配をうけてゐた親からかれらは少しづつ離れてゆくところの自分を見出すのであります。しかも子供は、全く孤獨になるものではありません。彼等自身の中に「腹心の友」が現れて今後はそれとともに秘密をまもつてゆかうと感ずるのであります。

此の「腹心の友」とはどんなものであるかエドモンド・ゴセの手記には詳しく出てゐないから判りませんが、惟ふに今までは外から親に支配せられてゐたのが、今後は内から何物かに支配せられるやうになつたことを右のやうに感じたのであらうと思はれます。そしてこの「内なる何物か」こそ、外の支配からまつたく獨立した「自我」の萌芽に外なりません。さて、この後の兒童は、内からと外からとの二つの命令者に従つて、おのが行動をいとなんでゆくことになります。そして次第にこの内なる自我の力を強く強く感じ自由を求め外からの命令を壓迫として嫌がるやうになります。内にゐる「腹心の友」は、秘密の相談相手であります。これに信頼し、これと

ばかり相談して秘密の行動を行います。そのままに放置しますと手に負へない天邪鬼になつてゆくのであります。そこで性格養成の手段としてこの内なる腹心の友もまた結局は本當に秘密をまもるものでなく、信頼するに足りぬものであるやうに仕向けねばなりません。父親や母親がこのものを見透す力がないとすれば、さらにもつと全知全能なるものが在つて、すべてを見通してゐることを感ぜしめるのがよいのであります。

ここに宗教教育の出発點があるのであります。子供にむづかしい教理はもちろん判らう筈はありません。しかし彼等の行動は、微塵も秘密を許されないのであつて、全知全能なる絶對者が外からといふよりも、内からかれらの秘密の腹心の友を通じて常にかれらを監視してゐることを感得せしめることが肝要なのであつて、それは素朴なる形ではあるが兒童にとつて一の宗教的生活を営ましめることであります。凡そ十歳にもなれば既に斯る指導を始めて早過ぎる事はないのであります。

信 仰 相 談

質問 歡迎



擔 當

中 村 辨 康

聖道門の信と淨土門の信とは異なる

問

信心の近道は坐禪ですか、念佛ですか。また各々の性質に依つて違ひますか。私は坐禪と念佛とを致して居りますが、兩教相倚らずして道達しと申しますが、先生を煩はし御指導を願ひ申し上げます。

(板木・烏山・愛讀者・大輪清)

答

悟りを中心とする禪宗などでも信心と云ふことを申しますが、淨土教で云ふ信心とは丸で違つて居て、一分の悟り即ち見性したことを指して居ります。つま

り「悟即信」の建前から言つて居るのですから、念佛と信と坐禪の信とはその斷齟齬はとにかくとして大體行き方が違つて居ります。従つて禪念佛修の場合の念佛は淨土教で申す念佛と其の内容に於て大きな相違のあるのは申すまでもありません。

自力修行を中心とする諸宗でも念佛を用ひて居ましたことは、一校起請文講義の時には申し上げたことで、それを御覽願ひたいと存じますが、支那の禪宗の智旭大師の如きは、禪と教と律との三は念佛の一源に歸すると云

ふ説を立て、佛教の根本は畢竟念佛にあるとし、「若律若教若禪、無レ不從淨土法門」流出し、無レ不還歸淨土法門」と云ひ「阿彌陀佛を念じ得て熟すれば千七百の公案、向上機關また裏許に在り」と「禪」は結局「念佛陀」の中におさまると見て居ります。現在支那の佛教は「禪念佛修」で禪宗と淨土宗との合の子見たやうなものです。

之れと云ふのも佛教の實際法中、支那に於ては禪と念とが最も實際に即したものと見て居るからであり、人間の氣質を昏沈と掉舉との二種類に區分し、氣の沈み勝つ人には念佛をすゝめ、氣のはしやく人には坐禪をすゝめたのです。大體男と女とでは男は掉舉、女は昏沈、男でも若い者は掉舉、中老以上は昏沈若い者の中でも順境の者は掉舉、逆境の者は昏沈と云ふやうに、大ざつばの分けかたではありますが、大體昏沈の人は多く、掉舉の人は極めて少ない。だから念佛の方を多く取り入るべきだとして居りますが、人間は複雜で一方的ではないから、結局坐禪と念佛との兩



信仰相談

若し悟りを信心とする意味ならば、禪念觀修でも結構でせう。昔の聖道門の人々は坐禪觀法を助ける意味で念佛

方を、人々の氣分や好みに依て、或時は坐禪或時は念佛と併修することにしたわけであります。
然しそれは坐禪も念佛と同價値の修養法と見て居るからであります。然し少くとも法然上人の淨土教に於てはさう云ふ見解は採らざるどころです。そうした考へと、眞の信仰とは大きな距りがあるからです。
それで、あなたの御質ねの中心が何處にあるのか一寸判明しないのですが、何の爲に坐禪をやり、何の爲に念佛するのか、信心の近道と云ふけれども、その信心とは何を指して居るのか、其處をハッキリしなければ、いくら坐禪をやり念佛をやつても、日暮れて道遠しと云ふやうなことになるのではないかと思ひます。

に擧進したのですから、事の成否は兎に角として、それより外にゆき方を知らなかつたのですし、また事實それより外に方法もないのでせう。

然し信念を淨土教で云ふ「仰いで信ずる」

淨土宗の五大本山と法然上人

問

淨土宗には總本山と四大本山とがあるさうですが、この五大本山と法然上人との關係、及びその寺の簡単な緣起、變遷相互の關係などを知りたいと存じます。御面倒でも誌上でお知らせ下さい。

答

(山口・古屋峰吉)

徳川時代には、東京芝の増上寺が淨土一宗の總録所であり、京都の知恩院は一宗の總本寺でありましたが、知恩院と増上寺とは、各宗を通じて五人しか勅許されない大僧正が、一人宛常置されて居りまして、各宗から淨土宗は、かうした意味が

の「信仰」とするならば、坐禪などは要らぬことで、謂ゆる「專修念佛」より外にないのですから、問題は解消すると思ひます。

之れをハッキリとお定めになつてから、もう一度お質ね下さいまし。

らも相當に觀望の的になつて居たやうです。
知恩院は華嚴大谷寺と云ひ、法然上人が高倉天皇承安五年に淨土を御開きになり、今の知恩院の附近に西山からの庵室を移した「二ツ岩の禪房」又は中の坊とも云ひますがそれにお住ひになり、淨水禪房(配の坊)と松下禪房(東の新房)とに門弟を居らせました。ところが京都北嶽と謫訴から遂に四國の流罪と云ふ事になり、遂にそれもすつかり荒廢してしまひました。然し勅許に依りまして京へ御歸りになりました時、慈覺和尚が大谷寺・觀音院の地域である南禪院と云ふのを寄附しましたので、それにお住居になりました。是



白川禪房の印

が大谷禪房と云ふもので今の紫雲堂のあるところ。其後嘉祿三年六月山門の衆徒がこの大谷の房舎を毀し再

び建てる情態に立ち至りました。それをなげ

かれて紫雲房藏上人が復興し大谷寺と稱したのが今の智恵院のはじまりで、それから度々火災に（永享三年、應仁元年、永正十四年、寛永十年）罹つたり色々な變遷を経ましたが謂ゆる燬太りであつて段々大きくなり、地城四萬六千二百餘坪京都第一の景観を有するやうになりました。當寺が二宗の總本山となつたのは大永四年後柏原天皇の御時からであり宮門跡となつたのは元和以來であります。明治になつて、兩管長が置かれ西部は知恩院東部は増上寺と云ふ二部制でしたが、明治二十

年に知恩院門主を以て淨土宗管長とすと云ふ御が敷かれ今日に及んだのであります。

また田中戦前町の百萬遍は知恩寺と申しまして、やはり紫雲房藏上人の復興にかゝる

ものです。長徳山功徳院と云ひ、もとは加茂の河原屋（現在相國寺のある所）にあつた神宮堂でありまして、法然上人も一時お住ひになつて居た舊蹟です。それを源智上人が知恩報恩の爲に御影堂を建て、知恩寺と稱したのでした。そのち元弘元年に役所が流行した時、後醍醐天皇の勅命で宮中に於て一週間の百萬遍を行ひ祈禱があつたその事で「百萬遍」の寺號を賜りました。それから文安六年、寛正二年、文明元年などに勅命に依り百萬遍祈願をつとめ、文明五年から毎年正五九の三月の十六日に百萬遍を行ひ宮中でも其當日には之を行はせられることになりました。その後第二十五世の傳譽顯秀上人の時には立派に淨土宗第一の寺になつたので、當寺を本寺、知恩院を別院とすることにしようとする議さへ持ちあがりました位であり、其後にも知恩院と知恩寺と何つちが嫡流かと云ふ爭論もあつた程でした。現在の地に移つたのは足利義滿が國相寺を建てる時、堀川一條の地に移り、更に寛文三年に炎上した時今の地に移つた

のでした。

また左京區岡崎町にある黒谷は紫雲山金戒光明寺と云ひ又た新黒谷とも云ひます。法然上人の御住りになつて居た白川禪房の跡と云ふことになつて居りますが、第四世專載上人の頃に本當の寺になつたのではないかと云はれて居ます。白川禪房の繼承者である徹空上人が第二世になつて居るところから推察しますと、白川禪房と密接な關係があつたことが相傳されます。それから第八世の運空と云ふ人が後光嚴天皇に「戒」を授け奉つたので「金戒光明寺」と云ふ寺號になりました。また後小松天皇の御時「淨土眞宗總本山」と云ふ勅額を賜りました。境内は四萬四千六百六十坪あります。徳川時代に淨土宗京都四箇本山の一となり明治以後も引續いて五大本山の一となつて居る譯です。有名な法然上人自筆の「一校起諸文」は當寺の寶物です。

次ぎに寺町岡小路にある清淨聖院は元禁裏内道場として清和天皇の勅に依つて宮中に建てられてあつたものですが、後に禁裏の東へ

の河原屋（現在相國寺のある所）にあつた神宮堂でありまして、法然上人も一時お住ひになつて居た舊蹟です。それを源智上人が知恩報恩の爲に御影堂を建て、知恩寺と稱したのでした。そのち元弘元年に役所が流行した時、後醍醐天皇の勅命で宮中に於て一週間の百萬遍を行ひ祈禱があつたその事で「百萬遍」の寺號を賜りました。それから文安六年、寛正二年、文明元年などに勅命に依り百萬遍祈願をつとめ、文明五年から毎年正五九の三月の十六日に百萬遍を行ひ宮中でも其當日には之を行はせられることになりました。その後第二十五世の傳譽顯秀上人の時には立派に淨土宗第一の寺になつたので、當寺を本寺、知恩院を別院とすることにしようとする議さへ持ちあがりました位であり、其後にも知恩院と知恩寺と何つちが嫡流かと云ふ爭論もあつた程でした。現在の地に移つたのは足利義滿が國相寺を建てる時、堀川一條の地に移り、更に寛文三年に炎上した時今の地に移つた

のでした。

また左京區岡崎町にある黒谷は紫雲山金戒光明寺と云ひ又た新黒谷とも云ひます。法然上人の御住りになつて居た白川禪房の跡と云ふことになつて居りますが、第四世專載上人の頃に本當の寺になつたのではないかと云はれて居ます。白川禪房の繼承者である徹空上人が第二世になつて居るところから推察しますと、白川禪房と密接な關係があつたことが相傳されます。それから第八世の運空と云ふ人が後光嚴天皇に「戒」を授け奉つたので「金戒光明寺」と云ふ寺號になりました。また後小松天皇の御時「淨土眞宗總本山」と云ふ勅額を賜りました。境内は四萬四千六百六十坪あります。徳川時代に淨土宗京都四箇本山の一となり明治以後も引續いて五大本山の一となつて居る譯です。有名な法然上人自筆の「一校起諸文」は當寺の寶物です。

次ぎに寺町岡小路にある清淨聖院は元禁裏内道場として清和天皇の勅に依つて宮中に建てられてあつたものですが、後に禁裏の東へ

の河原屋（現在相國寺のある所）にあつた神宮堂でありまして、法然上人も一時お住ひになつて居た舊蹟です。それを源智上人が知恩報恩の爲に御影堂を建て、知恩寺と稱したのでした。そのち元弘元年に役所が流行した時、後醍醐天皇の勅命で宮中に於て一週間の百萬遍を行ひ祈禱があつたその事で「百萬遍」の寺號を賜りました。それから文安六年、寛正二年、文明元年などに勅命に依り百萬遍祈願をつとめ、文明五年から毎年正五九の三月の十六日に百萬遍を行ひ宮中でも其當日には之を行はせられることになりました。その後第二十五世の傳譽顯秀上人の時には立派に淨土宗第一の寺になつたので、當寺を本寺、知恩院を別院とすることにしようとする議さへ持ちあがりました位であり、其後にも知恩院と知恩寺と何つちが嫡流かと云ふ爭論もあつた程でした。現在の地に移つたのは足利義滿が國相寺を建てる時、堀川一條の地に移り、更に寛文三年に炎上した時今の地に移つた

のでした。

また左京區岡崎町にある黒谷は紫雲山金戒光明寺と云ひ又た新黒谷とも云ひます。法然上人の御住りになつて居た白川禪房の跡と云ふことになつて居りますが、第四世專載上人の頃に本當の寺になつたのではないかと云はれて居ます。白川禪房の繼承者である徹空上人が第二世になつて居るところから推察しますと、白川禪房と密接な關係があつたことが相傳されます。それから第八世の運空と云ふ人が後光嚴天皇に「戒」を授け奉つたので「金戒光明寺」と云ふ寺號になりました。また後小松天皇の御時「淨土眞宗總本山」と云ふ勅額を賜りました。境内は四萬四千六百六十坪あります。徳川時代に淨土宗京都四箇本山の一となり明治以後も引續いて五大本山の一となつて居る譯です。有名な法然上人自筆の「一校起諸文」は當寺の寶物です。

次ぎに寺町岡小路にある清淨聖院は元禁裏内道場として清和天皇の勅に依つて宮中に建てられてあつたものですが、後に禁裏の東へ



末寺四百餘箇寺を率ひて獨立しましたから當寺の力は半減されてしまひました。法然上人とは直接の關係がない

移したものです。當寺も度々炎上しましたが昔の御縁故で度々御殿や御下げ金を賜つて居ります。また御代々の天皇皇后皇子皇女の御位牌や御尊像が安置されて居ましたが、明治九年泉涌寺に奉祀され、十一年特旨を以て海和天皇樹上天皇の御尊像及び尊牌の返還を受けました。當寺には、兩天皇の御尊像の外に東山、光格、仁孝、孝明各天皇の御尊像、及び敏達院、光明院、靈子内親王、勝子内親王及び皇妃皇子皇女孁方三十一方の御入棺があられたので、皇室とは深い御因縁が結ばれて居ります。また天正十七年に公裁に依つて前述の黒谷金戒光明寺を當寺の末寺とし慶長十三年に三十六世良光上人が勅諭で住職することになったので以後住職は勅諭に依ることになりました。然しのに金戒光明寺は

やうです。有名な「三部の假名抄」の著者阿上人の眞筆本の西要抄と父子相迎とは當時の什寶の一つです。

東京の芝、三義山廣慶院増上寺はもと光明寺と云ひ見塚(今の龜町尾井町)にあつたのを西譽聖聰上人が明徳四年に淨土宗に改めたもので、第十二世源譽存應上人が徳川家康と師匠の關係を結び慶長三年に今の地に移りましたが、關東十八間杖の隨一で、總鉾所として一宗の樞機を掌握して居りました。この源譽存應と云ふ人は誠にえらい人で現には表面には出ませんでしたが、家康公の有力な黒幕の一人でした。のち後陽成天皇から普光觀智國師の號を賜りました。また元祿七年第三十二世了也上人が大僧正に任ぜられてから代々當寺住職は太僧正任官と定められました。度々炎上しましたが代々徳川家菩提所として輪免の美をきはめ寺祿一萬五百四十石、寺域二十萬坪といはれます。明治元年明治天皇行幸、翌年勸修所となりました。明治六年神佛合併大教院となり、翌年廢遠以東の

寺院を當寺の所管とし、同八年大本山と公稱され、十一年東部本山となり管長が置かれましたが二十年に廢されました。法然上人との直接の關係はありませんが、淨土宗の代々相承は當寺が源泉のやうになつて居りました。また徳川時代には淨土一宗の聖間所で、此處へ來なければ誰も一人前の住職にはなれなかつたのです。従つて、徳物が代々の門下に輩出し、京都の方面へも進出したのです。ですから前述の京都大本山の住職は多く増上寺の關係者でした。また知恩院へは増上寺の住職が行かれたのです。委しく云へば切りも際限もありません。五大本山相互の關係などは到底申上げ切れることでもありませんから、先づこの邊でおゆるし願ひます。

淨き友 の會 信仰坐談會

八月は御暑さの眞盛りですから例年の通り御休みに致します。

淨き友の會幹事



たつあにとんほ

話 な 議 思 不

全 常 沖



死の直前に

僧侶に圍まる

月の明るい夜等に婉々と光る二條の鐵路をみてゐると何んとなく旅愁を感じる。その上を疾驅する汽車にもいろいろな話がある。

例へば難工事で幾多の犠牲者を出したトンネルを通過する時、機關手が妙な幻覺に襲はれるといふ。ゴウ／＼と音を立て、猛進してゐる列車の上から工夫が平氣で鐵路上に降りて行く、又上つて来る、また降りてゆく。

又例へば進行中に突然前方に白衣を着た女を認めて急停止すると、そこは曾て轢殺したことのある踏切だつたといふ話もある。

ある晩のことである、省線電車の中に老婆と若い娘(孫かも知れぬ)の二人連れが乗つてゐた。すると老婆が「あんなにお坊さんにならんでゐるよ」といひ出した。娘はむげに笑ふわけにもゆかず「お坊さんは一人もゐま

せん」としきりに老婆に云ひ聞かせるのであつた。

しかし老婆は、その省線電車に附つてゐる乗客全部が僧侶に見えるらしい、いくら娘が否定しても老婆はしきりに「坊さんが澤山にゐる」と主張してゐた。或ひは乗客以外にも多數の僧侶が見えるのかも知れない。

その内娘も諦めてか反對しなくなつたので、老婆も強ひて口に出さなくなつた。だが老婆の顔は相變らず澤山の僧侶に圍まれて嬉しさに見えた。

やがて電車は、その二人の降りる驛についた。娘は少しあはて氣味に、

「さあ降りませう」

と老婆をせき立て、先きに降りたつた。やがて電車は再び走り出したが、すぐに停らざるを得なかつた。

それは老婆が電車とプラットホーム間の落ちて、電車に轢かれたからであつた。老婆はそのまゝ絶命してゐた。

立證された傳説

死人を招く首

私の地方では、人が死んで、それを納棺するときに、その首があまりに軟かくブランブランする場合には、必ず、同じ家族の間で近いうちに死人が出るといふ傳説がある。

私の姉が長病ひの後で死んだ時の事である。私の父が、姉の死骸に繩をかけると、「おゝ冷たい！」と云ひながら、それを抱き上げて、棺の中に入れてやうとしてゐた。

ひどくやせて骨と皮ばかりの死人だったのに、父は何うしたのかふらふらとよろめいた。と、その拍子に、死んだ姉の首が、まるで、ベネ仕掛のやうに、ブランプランと後へソツクリ返つたり前の方へ招くやうに落ちた。

「アラ！ あんなに首がブラブラするよッー」
今まで、息をつめ、涙を吞んで死人の納棺を

見守つてゐた人々の中で、近所の手傳ひ婆さんが思はず叫んだものである。皆の顔色がサツト青ざめた。

「何いふとる、馬鹿！」

と父は不吉を振り拂ふやうにたしなめた。

それから丁度一年目。

例のスペイン風が私の地方にも猛威を逞しうして来た。そして姉の死んだ同じ月に、生れてから病氣を知らないといふがこんな父は突然もみ殺されるやうにして流感のために斃れた。そしてそれから半年もしないうちにう一人の姉が又二人の後を追つた。

遂に正體發見

宿直の怪

私の卒業した小學校といふのは、建てられてから幾年経つたか知らないが、とても非道いボロ校舎であつた。廊下等も所々張り直したりしてあつたが、それでも私等が少し亂暴

に馳け廻るとギシ／＼音がして、さすがに白どもも先生に叱られる前に静かに加減して歩くやうになつた程であつた。だから學校の宿直室でも立附がガタガタで、おまけに見るから陰氣な部屋であつた。

ある日のこと授業が終つて間もなく、例の如く先生達が教授室で雜談に華を咲かせ、話もそろ／＼終りに近づいた頃であつた。一人の訓導が何か云ひ譯でもするやうに恐る恐る「實は昨夜宿直室に寝てゐたら妙な聲が聞えたのだが……」と云ひ出した。

すると他にもこの「妙な聲」なるものを聞いたものがあるらしく、「實はね俺も……」といふ者が出て来た。さあこうなると今まで平氣であつたのが、急に薄氣味悪くなつて来た。お互にやがては自分も獨り泊る部屋なので、皆捨てゝはおけぬ氣になり、特にその日の宿直の者は、早速検分すべきである、獨りより大勢の力を借りたらしい、云ひ張るのであつた。

その結果、宿直室の周圍から天井から探せ

るところは全部検分してみたが、何も不審なものもない。これでも未だ納得出来ない氣がしたので、それならといよく床下を検べることゝなつて、土まで掘り返したのだが、なる程出て來た。確かに人骨であつた。

先生達も思はず顔を見合せて言葉も出なかつた。誰も他事でない氣がして、直ちにこれを掘り出し、その日の内に近くの寺に葬つた。そして「今時分になつて聲を出すなんて、變な骨だね。發聲帯は何處だらうね」等と笑つたものだつた。

ところがその翌日、教授室はまた大變な騒ぎであつた。それは昨夜も亦同じ妙な聲が聞えたといふのであつた。

その原因について、あれこれだと種々論議を重ねたが、その結果は意見が二つに分れて落ちついた。その一つには骨を葬るのに簡単にやり過ぎたので、骨を往生させるに効果がなかつたのであると云ひ、他の一つには原因が骨でなく、他に何かあるのだと云ひ張つた。

だがこの議論も結局は何れとも判らず、そのまゝで、數日経ち、宿直室の聲は相變らず聞えると云ふ。調導の中には聲がしても當然だといふやうに養度胸をすへるものもあり、又まるで聲で殺されでもするやうに恐れ戦くものもあつた。

すると今度は、新しい發見に氣のついたものがあつた。それは宿直室の布団が急に重くなつて、夜半目がさめたといふのであつた。こう一人がいふと、これ亦殆んど全部の者が經驗したといひ出した。夜半に妙な聲を聞くのも布団が石のやうに重くなつて目がさめるからだといふ。これまでそれに氣のつかかなかつたのがおかしい位であつた。

いよく原因は夜具にあるといふことに意見が一致した。その夜具なるものは一月程前に新しく買ひ込んだばかりであつた。宿直室に調導が全部集つた。先づ問題の夜具を中央におき、鉄を以てバラシ始めた。今まで使用してゐた夜具だが、氣のせいか妖氣がただよつて見えた。布を切り、中の綿もこまかにほ

ごした。布は新しいが綿は古いものを使つてあつた。

その内に一人が「アツ」と叫んだ。他の人達も驚いて一勢にその方に向けた。そこには古く固くなつた綿の中から小指が一本現はれた。それを包んだ綿には黒く血がにじんでゐるのであつた。

亡靈が

戸を開ける

私が小學校に入つて最初の暑中休暇だつたから大部昔のことである。私はこの休暇を私の親戚のお寺で過したのだつたが、ある日のこと、朝早くから叔母の手傳ひで座敷の掃除をやつてゐた。その日は葬式があつて大勢のお客が來るといふことであつた。何んでもその日の佛は、五歳になる男の子を一人残して死んで逝つた若い母親だといふことで、私も

子供心で氣の毒だと思つた。

「さあ、掃除はそれで終つたから、玄關の障子を閉めておくれ、後でお菓子をおげますからお客の歸るまで獨りで遊ぶんですよ」

叔母さんは私の手傳ひをねぎらつて、さう云つて呉れた。私は簡単に鏡の下りる障子を閉めて奥に入らうとした。その時、誰か外に來たらしく閉めたばかりの障子をガタ／＼云はせて開けようとしてゐる。叔母さんは「ほうら、もうお客さんですよ、早く向ふに行きなさい、只今お開けいたします」

と云ひながら急いで玄關の障子を開けにかゝつた。私は來客といふのが珍しく、隣に隠れて眺めてゐたが、叔母さんが障子を開けても外には誰一人來てゐなかつた。私はまた玄關に走つて行つて、「誰かゐるないじやないか」と叔母さんに云つた。

葬式が終つて、後に施主だけが残つてゐた時、叔母さんと施主と次のやうなことを話してゐた。

「今朝ほど、皆さんがいらつしやる十五分ば

かり前に、今日の佛様がお先きにこちらに参りました」

私はたゞ人が死ぬと一足先きにお寺に來るものだなと、思ひ込んでしまつた。今でも私はその時のことを想ふと、死ねばお寺に行くものだと思ふ氣がする。

雨天に聞える

足駄の音

今でこそ周圍が賑やかになつてしまつたが、私の幼い頃には夜となれば、すつかり靜かになつて、庭先にも出たことがなかつた程淋しいものだつた。何時もガラシとした本堂や庫裡は自分の家でも居間以外の暗い部屋にゆくのに飽かつたものである。

その頃のこと雨天の夜には必ず足駄の音を聞いたものだつた。門の方からカラコカラコロ明瞭にそれと判る音をたて、玄關の方に

進んで來る。そして玄關前まで來ると消えてしまつて、また門の方から玄關の方に進んで來る音がする。

今考へてみても、その足駄の音を恐ろしかつたと云ふ記憶が全然ない。家人も何か當り前のことのやうに思つてゐたらしい。

雨が降つて夜半止んだ時などに、「今夜は足駄の音がしないね」

等と云つたものである。又例の音が聞え始めても、「ほうら足駄の音がしてゐるよ」といふだけで、それが何か怪しいものだと思ふ感じがなかつた。

その足駄の音は、門から玄關へと三四回進んで來ると、後はもう聞えないのが何時もの例であつた。玄關からもう一歩で内へ入るといふところまで進んで來るのだから、今でも何んの音か不思議に思つてゐる。

しかし、懐しい子供の頃の思ひ出として、足駄の音が未だ耳に残つてゐる。自分の家で雨の音を聞きながら、足駄の音は今頃何うしてゐるだらうかと思ふことがある。

何事も先づ第一に一に

お寺の相談所へ

皆で育ててあげよう！

相談所とは

今度浄土宗の寺院に皆さんのための相談所が出来ました。浄土宗の寺院なら何所の寺院でも開設されてゐますので、何事によらず御利用になると大變便利なものです。

しかしまだ相談所が出来たばかりで、お寺の方でも、相談なさる皆さんの方でも慣れないために、何うかすると満足ゆかない點があつたりすることもあると思ひますが、そんな時にはお互に勉強するつもりで助け合ひ、お寺の相談所を段々によくするといふ氣持でやつて欲しいものです。

又所によつて開設してゐない寺院でもドン／＼押しかけて開設を促して下さい。

何事も相談所へ

相談所に行つて相談する事柄は何んなことでも結構です。従つて相談したい問題の範圍とか程度とかは種々雑多になることとせう。この色々の問題を持つてゆくの、こんな些

細なことは相談するのは可笑しいとか、この専門的な事は相談しても無駄だらう等と思ふのは誤りです。何んなことでも相談してゐる内には決つと良い智慧の見つかれるものです。又問題は専門的で、お寺の住職には見當のつかないこともあるに相異ありませんが、こんな場合のために準備があります。

相談所の組織は、先づ第一に方面委員とか救護施設とかの既にある設備と連絡することになつてゐますので、取りあへずお寺に行けば、皆さんが行くの一番よい施設が應ずるでせう。又難しいことなら、辯護士や醫師やその他の専門家の知識を借りて呉れます。それでも満足出来なかつたらお寺の住職は東京の宗務所へ智慧を借りに來ます。宗務所では何んな難問題でも必ず意に滿つ解答が出来るやうに、各方面の權威ある専門家から教はるこの出来る設備が出来てゐます。

「聞くは一時の恥、聞かざるは一生の恥」で、解らぬことを獨りで考へ込んでゐても、よい解決の道はつきません。お寺の相談所は、皆

さんの持ち込む相談事なら何んなことでも、又何回でも必ず皆さんの満足するまで一緒になつて考へることになつてゐます。

相談したい事柄

それなら相談所を持ち込む事柄には何んな種類があるかといふに、先づ信仰上のこと、生活上のこと等があります。その他に相談事項を挙げれば次のやうなものがあります。

① 戸籍のこと、法律上のこと、金銭問題、育児や教育や結婚に關すること、住居、生業、内職、保健醫療、助産、埋葬、紛争調和、證

院がその土地土地で活動するには、この外に具體的に社會に働きかけ、お念佛の社會を、つまり淨土をこの地に建てるのに役立つやうな色々の仕事を持つてゐます。例へば教化事業、社會事業、社會施設といはれてゐるのがそれです。

昔は更に戸籍から教育から總て寺院が行つてゐたものが、社會の發達とともに、夫れ夫れの専門的發達によつて分化され、段々と寺院のなす仕事が減じてしまひ、遂には寺院でなければならぬ用件が、精神修養と人生儀禮の二つだけになりました。しかし寺院の持つてゐる機能はもつと積極的なもので、日常生活に社會から離れられない指導的位置に立つことや救護の上の仕事を持つてゐます。そこで段々と諸種の事業も興つて來たのです。

各部門が専門的に分化し、程度が高められることは甚だよいことですが、あまり進歩すると、今度は一般のものにとつて難しく、自分の力だけで乗り難くなつて來ました。

このやうなわけで、新しく出來た相談所は寺院の活動する新方面を作つたことになりました。そして皆さんが毎日の生活に次々と出て來る問題の中で、少しでも迷つたり解らないことがあつたら一語に考へ、相談相手となつてお手傳ひをしようとするのです。寺院にしてみれば、是非骨折しなければならぬ公益事業なのです。

特に現在は聖職完遂のために力を合せて邁進すべき時です。お寺の相談所は今後とも段々に發展させてゆく永久的設備であります。この非常時に最も有意義な仕事となるで

あります。

（安島大祥）

（安島大祥）

（安島大祥）

會員通信

支部結成の

所感

東京 小島 戒純

會員の皆さまに暑中御見舞申し上げます。お中元全廢といふ聲を方々で聞き、まことによい生活改善の一つと思つてゐます。そこで小生もお中元を全廢して、從來出征中の勇士達に毎月贈つてゐた「淨土」を、檀信徒全部に送つて、大變喜ばれました。

先日自坊の施餓鬼會の際に、一言貴會のことに言及し、會員になるおすゝめをしましたところ、その場で直ちに入會を希望せられた方が可成あつたのに力を得て、今

度は或る工場主に「何か修養會を常設したいが」と云ふ希望に答へて會員になつたらと申しました。

こんな具合で有縁の人々に導かれて、急に支部を結成することに決め、段々勧誘してみると、矢張り少數より多數の方がよいわけで一人でも多くと機會ある毎にお勧めした結果、忽ちの内に別送五十名の會員が出来ました。

實は最初から支部をつくる計畫があつたわけでなく、有縁奇縁で出来てしまつたやうなわけですが、出来てみれば善いことを一つしたと感謝したい氣持です。

私達の仕事には資金や準備を差程必要としないものがあります。ただ機縁をつくるだけで後は自然と出来る場合が多いやうです。

だから一寸した氣の配り方、一舉手一投足の骨折りで誤なく縁の結ばれたものです。

阿彌陀さまの歸りに集り来る者は皆全部有縁の人達ばかりです。お念佛を申すには、お念佛に多少なりとも御奉公致さねば氣のすまぬものがあります。

今時分になつて支部を結成しても、少しも自愧がましい氣持はありません。これも宗祖法然上人の御遺徳に合掌する氣持を少しでも現はし得たと思つて嬉しく思ひ感謝してゐるものであります。

一錢地藏に

感激

青森縣平館林 福昌庵

先日或る會合があつた席上で

「淨土」を紹介し、石橋徳作氏の「四人の純情」の話をした。特に「一錢地藏建立のこと等について語つた際に、同席してゐた人々の中には感激のあまり涙を流したのもあつた。又その席に、名譽の職死をなされた作を持つ母親もゐたが、早速、この一錢地藏に加入させてもらふこととなり、私の所に申し出ました。「淨土」會員の皆様

異教徒と交

つて

長崎縣 荒木 ちづ

私達の部落に禪宗、淨土宗の外に回教、カトリック教等があります。これらの人には表向きは當

極樂寺の檀徒ですが、一ヶ年に一度もお寺に詣るでもなく、説教一つ聞くでもありません。又日曜日には集つて昔から傳つてゐる極く極く秘密のまつり方をしてゐます。同々教の人達は正直な人ばかりなので、今の内にほんとの信仰に導けたらと思ひます。それで私達は先づ自分の浄土宗の信仰をまます修養して、この人達に接し少しづつお寺に出入りするやうに努めてゐます。もう少し経ちましたらこれらの人達に「浄土」を贈り、知らず知らずの内に信仰に導きたいと考へてゐます。何卒宜しく御指導下さりませ。

「浄土」を師

として

宮崎・飯田 押川 秀秋

私は日本茶製造業で、つまり茶商であります。が、販賣の検査員を勤めてゐます。私の家は眞宗で、私自身は法華宗でありましたが、法然上人の御遺徳に感じ、今では浄土宗に歸依し僧籍に入つてゐる身であります。そして山門外の僧として、同行の諸氏とともに色々研究し、修養に努めてゐますがそれには雑誌「浄土」が全員の師となつてゐます。一冊の「浄土」が破れてしまふまで皆で讀み合せ、批判し、研究してゐます。私達は毎朝先づ浄土勤行式を勤め、それから點茶に取り掛けることにしてゐます。法然上人の御遺徳を廣く普及したいといふのが私達の念願であります。

小橋 麟 瑞 監
修・伊達幸太郎 揮毫

法然上人の聖像



竪一尺二寸横一尺五分原色十度
刷精巧高級品

價一葉 五圓

送料無料

十年苦心・鏤刻の結晶なる！
髣髴として上人に面接するの感あり

申込所

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替 東京 八二一八七番

淨き友の會座談會 報 身 の 彌 陀

聽 問 記

法身佛とは
はつしんぶつ

江角金市氏「甚だつかぬお尋ねのやうですが、化身と申しますのは應化身で釋尊を指し、報身は極樂莊嚴を成就せられた阿彌陀佛で

あると承つて居りますが、すると法身と申しますのは何を指すのですか。」

中村師「法身とは理體で、例へば時計の原理といったものです。一口に時計と申しても原理としてのみ考へらるゝ場合（法身）と、具體的發現體としての實在の統合相として把へられた場合（報身）と

個々の作用、效用として眺められる場合（應身）とが區別し得らるる如くで歴史的人格としての釋迦と五劫思惟の果報を示さるる阿彌陀と、宇宙の理法としての法身佛とを分つのです。そして、實は三身即ち一であるのですが暫く之を各別にして區別するのです。」

江角氏「すると現身佛たる釋尊が中心ですか。それとも法身佛ですか。」

中村師「現身佛から滅後に至り法

身佛の思想が生じ、更に報身佛の考へが出たとも言はれます。しかしそれは單なる思想上の變化でなく、佛教的世界觀の徹底に依るのです。佛教では世界を事法界と理法界とに分ちます。具體的現象界とそれを裏打ちする理論、法則の世界とであり、現實の宇宙進展は之等二者の統合の上にあると見るのが報身を表に出した見方で、之が阿彌陀佛の性質とするので

す。理法を立てるものには法身佛たる大日如來があり、釋尊は具體的人間界に直接の作用關係を有たれるものとして應現せられた佛、即ち應身又は化身の佛と申すのです。もとより、夫々に他の二身が裏に含まれて居り、三身即ち一である故、眞實相は區別して眺むべきではないが、假に三者を區別するわけです。」

江角氏「どうも歴史的發現としての釋尊を化身とするのは分るのですが、阿彌陀佛を報身とすると他の法身の性質がよく分らぬのです。」

中村師「宇宙理法を指して法身と呼ぶのです。大日如來は斯る理體身とされてゐます。釋尊が實は久遠實成の佛だとされるのも、歴史的化現は一時的現象であるも、實は不滅の法身の顯現だとの見方なのでせう。」

解 信 と 信 證

江角氏「阿彌陀佛には衆生を救ふ作用、働きがあり、釋尊の出現を考へなくとも一切衆生を救はせ給ふ力として考へられると思ふのですが、如何でせうか。私には、どうも、阿彌陀佛は宇宙を生かしめ給ふ力とし根源としてしか理解

出来ぬのです。」

中村師「宇宙の機軸原理、即ち理法身、法身としてしか阿彌陀佛が分らぬと仰言るのですか。それは誰でも初の中はさうなので理の上でのみ理解し得る（解信）ので仲々報身としての阿彌陀佛は分り難い。理窟でなく證得、證感、證驗の境地だからです。信仰には理が解つて生ずる解信と、行の上に實證せられて生ずる證信と歴史上の事實を認めるとの見佛から生ずる證信と、報身の阿彌陀佛が心に感ぜられた時に初めて生ずる仰信との三者がある。仰信は不可知の境界で仰いで信する他ないのです。佛は不可知であり従つて信仰は假令一分の解信、證信を有つても仰信の境地に達しなくてはならない。」

入信過程について

江角氏「解・證・仰信と職次に信仰は違ふものですか。」

中村師「いや、必ずしもさうでない。よしんば理解力劣悪な無智文盲の者でも仰信し得るのです。入信過程には尚ほ二過程が分けられて居ます。既に就人立信と就行立信との二者で、親鸞上人も「よき人」の教を被つて信仰に入られた。法然上人にすかさず参らせて信仰に入られたと言はれてゐる。佛語に信はなく、善導の釋も信ならず、従つて法然の教も信ではなく、それ故にまた親鸞の信ではなく、それ故にまた親鸞の言葉も誤はあるまいといふ。自分の信する人の言は貴方方も亦信し得ることせう。實証實證しなくても信し得るものです。」

江角氏「それは確かにさうです」

ね。」

中村師「で、證信を経なくても仰信はあり得るが、實証實證すれば尚ほ確かである。あの別時行儀の目指す所も、そこにある。所謂念佛三昧の境地を證驗しようといふのである。電燈をつけて見て電燈の明るさが分る。昔の人の蹈んだ道を自ら蹈んで見て初めてその貴さが分つて来る。」

理窟と實際

石川己之助氏「人間といふものは、理窟でも分るが、それよりも實際的實利的なもので、目に見えぬ線の有難さは何々分らず、小遣でも貰つたり、菓子でも貰ふことのすが、有難く感ずる。一粒の米の有難さも、それが千粒になつて戻つて来て初めて感ずる。その癖一粒の米の儘ではつい粗末に考へ

易い。」

中村師「理窟を押し／＼すれば理窟でも信仰に入り得るものなのですかね。」

石川氏「醫者が、本當に病人を看とり得るやうな心構へになるには、どうしても信仰に入らざるを得ないといふことです。」

中村師「科擧者もその道を問ひつめてゆけば結局信仰の世界に入るといふ。結局人間は信仰なくしては究極の安心は有てない。」

江角氏「解信がその信仰信ではないか。」

中村師「解信は全分を盡さない未知の大部分が存する故に仰信とからざるを得ぬ。」

鳴海要吉氏「我々は唯佛くだけだと思ふ。智が働く中は知つてると思ふ中は、信けない。智慧に導かせば流され易い。仰信のみが純

率な信仰の立場でなく無智の立場に還れといふ教は有難いと思ふ。」

中村師「推しつめて言へばさう

です。實証實證と言ひ解信と言つ

ても、それは誰でしたか、いささ

かのこと」だと言はれてゐる。然

し順序を言へば理解も必要で、

それがなければ迷信に陥り易い。

従つて解信も證信もあながち捨て

は出来ぬ。科學と宗教とは相容れ

ざる二者ではない。大自來の神祕

はその儘にまた宗教への門であ

る。峯の松、谷の響も閑様に依て

は釋迦牟尼佛の聲とのみ知るで、

心の木は疎る處擲げられてゐる譯

である。山鳥のほろ／＼と鳴く聲

聴けば、父かとぞ思ふ母かとぞ思

ふ。と古歌にもある。」

鳴海氏「藝術的直感とか感情的

洞察とかは確かに人を宗教に導く

ものだと思ふ。」

中村師「疑いも知も正しく押進

めれば信仰に達せり得る。しかし

病氣になつてはいけぬ。癡となり

痴となつては駄目である。實際は

ずのついた疑や知を正しいも

のと思ひ込んでゐる場合が少なく

いのだが」

鳴海氏「輪廻も病氣からでせう

ね。」

實在の態として

江角氏「繰返すやうですみませ

んが、化身が歴史上の釋尊で、宇

宙の理法が法身だとすると、親身

といふのはどういふ性質か、理解

に苦しむのです。修行して果報を

得られた佛といふのでは、説明は

一應つくが、實在態としてどう考

へてよいか分り兼ねるのです。」

中村師「無量壽、無量光の佛と

して今現に在して活動せられつつ

ある佛であつて不變の原理とかい

ふ如き靜態的な佛の觀念とは違ふ

のです。我々の生命の大本であり

我々を生かし上げ慈しむ所の大

いなる生命と力とであるのです。」

江角氏「どうもまだよく三者の

關係が呑み込めないのですが。」

中村師「念佛を策勵してゆかれ

る外はないでせう。如來の溫い

慈悲が、しみ／＼と體感せられる

時が必ずあると存じます。」

中村康隆氏「私の拙い理解から

申すのですが宇宙には一定の秩序

があり、通貫した理法の存するこ

とは確かで、斯る理法に依て統べ

られてゐる大いなる實在が思念

せられ得ると思ふ、それがいはば

理法界であり、法身は斯る統合體

についての思辨的な把握とも言へ

るでせう。尤も佛教の法の理念は

空思想に裏打せらるるもので、全

實在界は空の姿として空の理法と

して把えられるのが正しいとも言

へませう。それは事々無礙であり

千變萬化の世界ではあると思ふ。

しかし斯様に空は一面に生々活動

の姿でもあるので、空とし法身と

して思辨的觀念論的にでなく、大

いなる生命活動の姿としてあらゆ

る歴史的な發展を齎す所の生命進

展相として把えられねばならな

い。生命進展の姿としてあらゆる

過去と現在とを内包し具現してゐ

るものであり、個々の生命現象を

生かし導き慈しむものと感ぜられ

ねばならない。要するに全實在相

を理念體としてでなく生命態とし

生命活動の姿として見るのが親身

の思想ではないかそこに本願の働

きかけも信ぜられると思ひます」

中村師「説明的には一瞬そのや

うでよろしいでせう。」(終)



中道を歩む信仰

—— 般若心經講義(第七講) ——

中 村 辨 康

(十) 空中に法なし

無無明、亦無無明盡、乃至、無老死、亦無老死盡、
無苦集滅道

(空中には) 無明もなく、亦無明の盡くることもなく、乃至、老死もなく老死の盡くることもなく、苦集滅道もなし。

釋尊が悟せられるに至つた動機は「苦とは何ぞや」と云ふ問題を解決しようとして、先づ昔の代表的な老死は何に依つて來るかを探究し始め、段々押しつめて行つて「無明」が遂に根本的原因であることを見究め、偕てその「苦」

を滅するには何うするかと云ふ問題から「正道」を歩むことに依つて「正覺」に達し「涅槃」を得るに至ると決着したことは、佛教に關心を持つ人の誰でも知つて居るところであります。

それで、この解答から「十二因縁法」と「四諦法」と「八正道法」とが生まれ、ベナレスでの最初の説法に於ては、主としてこれ等の法が説かれたと、傳へられて居ります。

然し普通に後世の大乗教徒は是れ等の諸法を「小乘教」と云つて居ります。御承知のやうに釋尊は在家の人々に向つては特に「施論」と云つて職業道德に關することとか、或は「戒論」と云つて一般的な生活規程などを主體として話されて居り、また機縁に應じては六方禮經とか玉耶經と

か其他色々通俗的なお話をなされましたが、出家に對しては多くこの四諦十二因縁八正道が説かれたと云ふことです。釋尊滅後の教團では、教團統制の必要上「律」の傳持に主力が注がれて居たものではありませうが、教理的には是等の諸法が中心でありましたのは事實でありましたから、原始佛教又は小乗教に於ての專斷特許のやうにさへ思ひ込まれたのであります。

今の私達にはそんな穿索はいらないと思ひます。古來「心經」の講義をする人が、多く前の五蘊や十二處や十八界の處は人乘天乘の爲に説き、今度の十二因縁は緣覺乘、四諦は聲聞乘、即ち聲聞緣覺の小乗の人達の爲に説くものであり、結局それらの「空」若しくは「無」を説くのは菩薩乘即ち大乘の中に引き入れんとする爲であると云つて居ますが、果してこの心經にそんな底意があつたものか何うかは疑ひなきを得ません。私達としてモツと素直に之れを見て行くのが本當ではないかと思ひます。即ち一般人が色々な事に捉はれて苦惱の中にまきこまれて居るのを何とかして是正せしめやうとして、このように色々な問題を取り出し、之れに否定的な言葉を用ひつゝ眞實な生命に生くべきことを指示されたものであると受取つて行きたいと思

ひます。これこそ本當に「心經」を見るものではないでせうか。

(イ) 空中には十二因縁法もなし

無無明亦無無明盡乃至無老死亦無老死盡

然してその十二因縁とは何であるかと申しますに、

1. 無明 (本當の自分と世界とが分らないこと)
2. 行 (持續、分析、綜合、進退等の心の作用)
3. 識 (認識し、分別し、了別する心)
4. 名色 (主觀客觀の對立觀念)
5. 六入 (五官及意識のことで委しくは十八界を指す)
6. 觸 (根と境と識との接觸)
7. 受 (感覺又は印象そのもので、いはゆる純粹直觀のこと)
8. 愛欲 (愛憎の妄見で、無明行に依る煩惱)
9. 取 (執着、即ち物事に捉はれて行く狀態)
10. 有 (存在觀念)
11. 生 (生存のこと、誤れる生命を邪命とも云ふ)
12. 老病死 (昔の代表として擧げたもの)

この十二は大體の分類配列に過ぎませんが、第一の無明を根本として行識等を起し、感覺等に依つて愛欲や執着や存在觀念などを起し、遂に生老病死の苦をなめねばならぬことになるのであるから、その無明を明とし、無明に依る行を明行とし、識を智として生活を整理して行けば邪命が正命に變化するから、遂に苦から脱却することが出来るとするもので、その苦の依つて生ずる順序を根本の無明から觀察して行く仕方を順觀と云ひ、老死からその原因はその原因はとさかのぼつて觀察するのを逆觀と云ひます。また一方の苦を滅却することに就いての觀察をなすのに、無明滅するが故に行滅し、行滅するが故に識滅すと云ふ具合に上から下へ進むのを順觀と云ひ、老死の苦滅するは生の滅するが故であり、生の滅するは有が滅する故であると云ふやうに下から上に逆に行くのを逆觀と云ひます。だから生觀に順觀逆觀があり、滅觀にも順觀逆觀がある譯で、都合四通りの觀法があるのです。

之れは菩提樹下で釋尊が繰返し／＼順觀し逆觀したと云はれるのですが、然しそれは今簡單に説明したやうな生やさしいものでは恐ろしくなかつたのでせうと想像されます。と云ふのは生觀滅觀を順なり逆なりにたゞ一連の堅の

關係だけを送つて行くのであるならば、それは單に因果關係の縷説に過ぎません。

名は因緣法と云つて居るけれども實が伴なつて居ないと思ひます。ですから之れは十二の名目の一つ一つの中に、それぞれ他の十一項目が緣として含まれて起つて居る現象として深く觀察して行かうとする方法であつて、人生苦惱脱却に必要な本質的探求を生活上の具體的事實や精神的な動きなどに就つて修練して行く修行法ではないかと思はれます。

無論理論としての場合は唯だその抽象的な評準を一連としてならべて説明するものではありませんが、修行法としては、唯だならべられた表面だけを考へるのではまだ足りないと思ひます。

それは或る時阿難尊者が

「十二因緣の理は誰にも判る簡單なものやうに思ひますか……」

と云つたのに對して、釋尊は

「十二緣起の理は非常に甚深なものである」

と云つて強く御叱りになつたと云ふ話がある位です。例へば四諦八正道の如きはこの十二因緣法の順觀逆觀に依つて

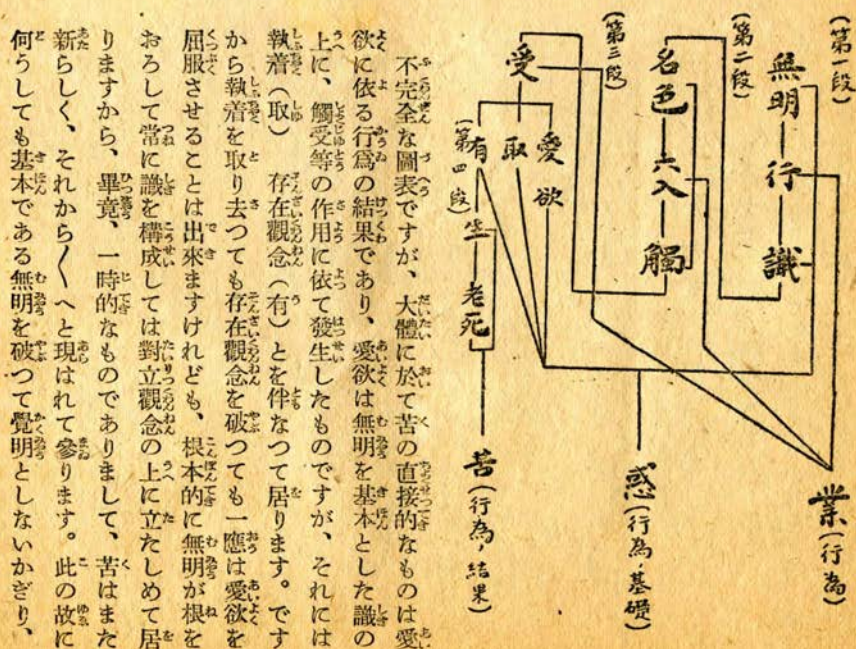
起つたものであり、俱舎の七十五法、唯識の百法もこれから發生したものであり、色々な佛教の行の哲學が之れを基礎として展開されて居るのを見ても、凡そその邊の消息が推察されるのであります。

また「雜阿含」の中にある「智經」には四十四智を説いて居りますが、それは「行」から「老死」までの十一支のそれぞれを苦集滅道の四諦に依つて觀察しつゝ四十四種の智慧を得ると云ふことを説いたものです。然かもその智は段々に深められて行くものですから、實には無數の展開がゆるされてよい譯で、八萬四千の法門は結局此の「十二因縁」の發展と見るべき理由があります。

また古來此の「十二因縁」に就いて「三世兩重の因果」と「二世一重の因果」との二通りの説明がありまして、因縁法と見ずに因果法と見て居るやうですが、それは後世の歪曲された説明であるとして近代學者は殆んど採用して居りませんから、之れは略して置きます。

この十二因縁のことを一名「業感縁起」とも申します。

それは私の苦は惑に基く業に依つて感じ縁起したものであると云ふことを説明したもので



苦を滅盡せしむることは不可能なのであります。

然るに般若の智に依つて「空」の理に徹することが出来ますれば、精神的な縛りがほどかれて自由になりますから、此の心經に云ふ如く

「無明もなく乃至老死もなし」

と、迷ひの状態を解脱することが出来る筈であります。しかしそれだけではまた迷ひの反對の「悟り」そのものに、しばられて、今度は違つた意味の繩の中に巻き込まれる恐れがあるので、更に

「無明の滅盡もなく、乃至老死の滅盡もない」

と、有るがまゝの現象を認めて、然かも一切のそれらに捉はれることのない素直な天地を開かしめやうともして居る譯です。

誠に何うもやゝこしい事になりましたが、かゝるごたくしたことを見るにつけても、如何に淨土門の信仰が誠に簡單であり、しかも素直に聖道門の目的とするところに直入し得るところの最易最勝の法門であることがよく判つて、私達念佛信仰に生きる者の有り難さがシミジミと嬉しく感じられます。

(口) 空中には四諦八正道もなし

無苦集滅道

苦集滅道とは謂ゆる四諦のことですが

苦(十二因縁の生觀の逆觀)——六道の苦報のこと
集(十二因縁の生觀の順觀)——三界の業因のこと
滅(十二因縁の滅觀の逆觀)——涅槃の樂果のこと
道(十二因縁の滅觀の順觀)——解脱の行法のこと
と云ふやうに、十二因縁の總轉的運用法に過ぎないものです。

此の中で「集」と云ふのは「煩惱の集り」と云ふ意味で、十二因縁で申せば無明、識、名色、愛欲、取、有などの集合を指して居り、また「道」と云ふのは「八正道」と云はれるもので則ち

1. 正見(知見又は信仰) 邪見に對す
2. 正思惟(正しき觀察) 惡智に對す
3. 正語(愛語、慈悲語) 妄語、綺語、惡口、兩舌に對す
4. 正業(實業、公公益業) 殺生、偷盜、邪淫に對す
5. 正命(眞生正命) 自利眞實、利他眞實
6. 正精進(眞正の努力) 廢惡進善

7. 正念（一心）身受心法に就いての正しい觀念
 8. 正定（人格統一）心垢の排除
 のことです。

釋尊は十二因縁を順觀し逆觀して大悟を得られました
 が、自分の悟り得た道を誰れに語らうかと考へられた時、
 先づ最初に心に浮んだのは、嘗つて教を受けた二人の師匠
 のことでありました。然しこの二人共もう既に亡き人とな
 つて居ることを知つて、已前の同行者で、今はベナレスの
 鹿野苑で、苦行を續けて居る五人の友達處へ行かれまし
 た。

そこで釋尊は「離邊處中」の話しをなさつたが、そのあ
 とで、この四諦八正道のことを説いたと傳へられるのが、
 有名な「初轉法輪」の説話であります。

その概要は記録に依ると、四諦八正道の一應の説明をし
 て更に

「われ以前に耳にせざりし法に於て之は苦諦なり。苦諦
 は知られざるべからず。苦諦は知られたり。眼（眞理を見
 る）生じ智生じ惠生じ覺生じ明生じぬ。

われ以前に耳にせざりし法に於て之れは集諦なり。集諦
 は斷ぜざるべからず。集諦は斷ぜられたり。眼生じ智生

じ惠生じ覺生じ明生じぬ。

われ以前に耳にせざりし法に於て之れは滅諦なり。滅諦
 は證せざるべからず。滅諦は證せられたり。眼生じ智生

じ惠生じ覺生じ明生じぬ。

われ以前に耳にせざりし法に於て之れは道諦なり。道諦
 は修せざるべからず。道諦は修せられたり。眼生じ智生
 じ惠生じ覺生じ明生じぬ。

比丘等よ。此等の四聖諦に於てかくの如きの三轉十二種
 の如實の知見にして我々に至極純淨ならざる間は天人界
 魔界梵天界沙門婆羅門天神人間の中に於て無上正覺を成
 じたりとは認めざるべし。然るに我は此の四聖諦に於て

かくの如き三轉十二種の如實なる至極純淨の知見を得た
 り。故に我は人天界に於て無上正覺を成じ得たりと認め
 る。われに知と見とは生ぜり。我が心の解脱は確實な
 り。之れは最後の生なり。されば再び生を受くることあ
 るまじ（長井博士の釋迦傳に依る）

と云ふことになつて居ります。

だが、この心經ではこの苦集滅道の四諦も空の理の上に
 於ては最早や問題でなくなつたと云ふのです。

つまり死生も迷悟も唯だ波の起伏であつて、存在觀を否

定しつくした「眞空」の中には唯だ眞生正命あるばかりであるから、天地の大正命の流れまゝに、己が小生命を随順せしめて行けば、謂ゆる一念萬年で、一瞬の中に無量壽を見得るわけであります。

明治時代の傑出した各宗を通じての名僧と云はれた福田行誠上人は八十三歳の高齡で、京都知恩院の御居間で御遷化になられました。御臨終の時、おそばに看護して居たお弟子の順誘さんが急いで來迎佛を取りに行つて、上人の枕元に懸けようとすると、何うした間違ひであつたか、これはまた、間違ひも大間違ひの閻魔様の像であつたさうです。

「之は飛んだことをした」と、一同嘩然としたのは無理ありません。

それはさうでせう。如來さまの代りに、事もあらうか、地獄の親玉の閻魔様の迎への畫像を懸けたのですから、全く粗忽此の上もないことで、全く狼狽せざるを得なかつたであらうと思ひます。

ところが行誠上人はもう臨終も間近かで、非常に衰弱し切つて居られました。人々の騒ぐのを制せられて、にっこりと笑はれ

「決して懸け替へるには及ばぬ。それで結構ぢや。料紙を借して呉れ」

と、蟲の息同様の御身ながら自ら筆を取つて

南閻浮提大日本國 行誠

八十三

右老病臨終の趣に付點檢申し候處御本願相應の人と斷定候に付御都合次第御來迎の用意可然候此段宜敷執奏有之度候也

閻魔王府

西方世界二十五菩薩御廳

と書かれたと云ふことです。それで筆をなげるとお笑ひになつて、靜かに念佛を申され、やがて大往生を遊ばされたのですが、誠に死生を達觀した大悟の人と云ふべきで、一大事に際しても心を動かすことなく泰然自若として、逆に弟子の過失を救つたその當意即妙の處置は全く今死に臨む人とは見えなかつたと申します。

之の境地が念佛の信仰に依つて得られたものであることを思ふと、誠に興味の深い面白いお話したと思ひます。

かゝる達觀即ち般若の智が開けた時、その人にはもう「法」に依る煩悩はなくなつて居ります。謂ゆる「無法

の法」に住するものであり「無相の相」を眺め「無生の生」に生きる人であります。

是の故に「空中」には修すべき特別の法もない譯です。

謂ゆる「中道を歩むもの」で、無道の中に居りながらおのづから正しい道を踏んで居るのであります。

飛行機が空を飛ぶのに、別段道をつけて居る譯でなく、何處を踏んでもさし支へはない筈ですが、そこにおのづから定まつた道が出来て居るのと同じです。

そしてその通つた道に跡をつけることもなく、道そのものに何の執着も持たないところ、これ正に中道を歩む者の姿に似て居るではありませんか。之れこそ佛教に云ふ「捨」の心境です。

やるだけやつて、やつたあとの收穫に捉はれない氣持です。

淨土の信仰も亦た此の氣持です。

一念一念を無量壽の如來の中に歸して行くからです。決して積みかさねではありません。一生涯を盡した念佛でも決して數量の効ではありません。多念を頼むのでもなく、一念を輕んずるでもなく、一念を充實させて多念にはげむのです。古歌の

彌陀頼む人は雨夜の月なれや影見えねども西へこそ行け
誠に貴い心です。

西へ西へと傾く月の心！

それはまた月の歩むべき正しい道であります。

如來に南無する信仰人の心はまたやがて般若波羅密の中道を歩む姿であります。

陸海軍病院慰問淨土雜誌

寄 附 者 芳 名 (敬稱略)

一圓二十錢	大連市聖徳街	高井辰子
五圓	西宮市堀免町	阿彌陀寺
三圓七十八錢	府下八丈島三根村	開善院
五圓	佐賀縣人野村	瀧川才哲
一圓三錢	青森縣川端町	顯昌寺
八十錢	京都市秋月町	小林周子
一圓	京都府千歳村	小林一行
一圓二十錢	大阪市東淀川區	提法寺
一圓八錢	東京市墨轡七丁目	栗本ハナ
二圓	東京市荏原區	阿部光次郎

編輯後記

◆事變は四周年目に入りました過去三年間にヒタ押しに押して行つた皇軍の威力には今更のやうに驚嘆いたします。わが本土の二倍半といふ廣大な地域を、あれだけの兵力で占據してゐると思へば、皇軍なればこそ爲し得るものだと思ひました。

◆支那の廣さは見たものでないと到底報らぬといふことです。しかし今から日本全土を草鞋掛けで二回周ると考へれば何の位かゝる想像だけは出来た。この規模の大きさに於て、又その猛進撃振りに於て獨國の電撃戦の比ではありません。

◆根氣のよいので有名な重慶政府と忍耐較べをして勝たねばならぬ我々銃後は、油断は禁物で、ま

すゝ縛つて行きませう。

◆暑熱ますゝさかんで、生物は身體一ぱい天の恵みを受け、いきゝとして活躍してゐます。唯人聞だけは暑さに閉口してゐます。しかし額から流れる汗を拭きもせずに仕事を續けてゐると、自分の身體の中に若々しい力を感じます。

◆吉田綾二郎先生の「秋風身邊にあり」で、われゝ自身の惡癖を指摘されてゐますが、世界一だ等と自惚れてゐる暇にもつと反省し改めなくてはならぬ短所缺點を自分自身で氣がつきます。自身をもつて率直に省みる必要がありませう。

◆佐藤春夫先生の「阿彌陀さま」は第二回目で、先生は「子供衆のために」と云はれてゐますが、先生の筆によつて目の前に浮ぶ法藏菩薩精進の姿には、誰もが興味津津たるものがあります。經典も要

するに成立當時に於ける一大文學であつた以上、現代にもこの種の文學があつて然るべきです。

◆阪本一郎氏の「子供衆の横へかた」は長年教育界に活躍せられてゐる氏のものだけに、最も根本的な注意が示されてゐます。親にとつて一番陥り易い點を擧げてゐるので、讀者に直接よい參考となりませう。

◆石橋徳作氏の「囚人の純情」は前回の續きですが、この話はこれで一應とめて、何れ機会をみて他日別の話を寄せられる筈です。

◆「浄土宗讀本」はますゝ好評を拍し、毎日お申込みが殺到してゐます。會員諸氏の御後援を一同感謝いたします。尙同書の申込みに際し、送料をお忘れになる方が多く會計部で甚だ困却いたしてゐますので、送料をお忘れなきやうお願いいたします。

◆勝手乍ら代金引替は一切お断り申上げます。

淨土 八月號

昭和十年七月二十日
第三種郵便物認可

昭和五年七月十日印刷納本
昭和五年八月一日發行
定價十二錢

東京市芝區芝公園五號地一〇
編輯兼 眞野 正順
發行人 眞野 正順
東京市芝區芝公園五號地印刷所 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一〇二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人讀仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

淨土 購買規定

一部定價 金十二錢

（送料五厘）

會費 金一圓二十錢

（送料不要）

（停）

一ケ年

大正大學 教授 大野法道

前澤土宗 教學部長 中村辨康

關西大學 教授 前田聰瑞三師共著

淨土宗讀本

しつかりした信仰へ！ 本書の示す道をたどつて！

いままでにこれ程長く纏つた佛教讀本はどこからも出たことがありません。だから、本書が一度現はれるや絶対的な好評をまき起したのは當然です。むづかしい原典によらづとも、これだけで淨土信仰に必要なものがすつかり解ります。行文もまた流麗、わかり易く説かれてあります。

絶対的好評・再版出來！

滿洲・支那・米國はおろか、前線からも注文が殺到しております。そして讀んだ人がすべて惜しみなく讃辭をよせられてゐます。

菊判四五〇頁・總クロース装
本文五號 巴ラルビ
挿繪 寫眞 人
定價 二圓五十錢
送料 一圓一十一錢
(朝鮮・臺灣・滿洲等 四九錢)

★會員一割引の特典は八月限りです。

★代金引かへの申込みは一切お断りしております。

★廉價でお捌ちしてゐるので、すから送料をお忘れなく。

法然上人
鑽仰會

東京市芝區芝公園十五號
總發東京八二一八七

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十五年七月廿日印刷納本 昭和十五年八月一日發行

淨土 第六卷 第八號

(停)

定價 金十二錢 (五厘)
外埠定價 金十三錢
郵料 金三錢